現代タタール・ディアスポラの言語選択
－ウズベキスタン、カザフスタン、タジキスタンを事例として－

櫻間 瑞希
筑波大学大学院博士後期課程 ／ 日本学術振興会特別研究員 DC1

1. はじめに

本研究が事例とするのは中央アジア３カ国（ウズベキスタン、カザフスタン、タジキスタン）に居住するタタールで、彼らは主に現在のロシア中西部・沿ヴォルガ川中流域からの数世紀にわたる断続的な移動を経て当地に暮らす人々である。ソ連期には多くのタタールがその当時の社会的状況によりロシア語を習得した一方で、伝統的に話されてきたタタール語はロシア語にその立場を追われていったと考えられてきた。このように、時代の流れとともに特にロシア語化が進んだ民族とされるタタールだが、近年ではタタール語にあらためて注目を寄せる人々も少なからず存在する。では、何が彼らをタタール語の「再」学習に駆り立てるのだろうか。その背景には何があるのだろうか。これらの疑問を出発点とする本研究は、中央アジア３カ国に居住するタタールの言語選択の実態、とりわけタタール語の学習、保持、継承の状況とその背景要因を社会言語学的アプローチから考察するものである。

1. はじめに
2. 博士論文の構成
3. 先行研究の課題点と研究課題の設定
　3.1. 中央アジアにおける言語状況をめぐる先行研究
　3.2. 先行研究の特徴と課題点
　3.3. 研究課題の設定
4. 研究方法
　4.1. 言語法の整理
　4.2. 質問票を用いた聞き取り調査
　4.3. タタール語の文法・語彙知識を問う簡易試験の実施
5. 研究対象
　5.1. 研究対象者の設定
　5.2. 調査対象者の設定
　5.3. 研究対象地域の設定
6. 分析方法
7. 結論
　7.1. 研究課題① 国外（タタールスタン共和国）の言語政策が言語選択に与えうる影響
　7.2. 研究課題② 国内（居住国）の言語政策が言語選択に与えうる影響
　7.3. 研究課題③ タタールの言語選択：タタール語の選択／不選択の要因と動機
　7.4. 結論から何が言えるか
資料 1. 博士論文の引用文献および参考文献
資料 2. 博士論文の構成

本研究の出発点となった友人の発言

「私はタタールだけれど、タタール語はまったく話せないので、時々、自分は本当にタタールなのだろうか、と考えてしまう。タタール語を話せないタタールはタタールらしくないでしょう？私はこれまでにタタール語を学ぶ機会がなかったので、(無償のタタール語講座でタタール語を学ぶ機会を得た）弟がとてもうらやましい。だって、彼は本物のタタールになる機会を手に入れたということでしょう。いいなあ…」

（タシュケント出身タタール（当時 20 代前半）留学生の語り、2012 年 12 月つくば市にて）

2. 博士論文の構成（目次は 38 頁以降参照）

博士論文は序章と終章を含む全 7 章で構成される。**序章**では、本研究の背景を説明し、先行研究を検討する。先行研究の課題点を踏まえたうえで、本研究の具体的な研究課題とその研究方法や研究対象の設定を提示する。

第 1 章では、第 2 章以降の議論の前提として、言語政策、国語と国家語、母語、タタール・ディアスポラといった概念の整理と検討を行う。

第 2 章では、研究課題①を検討するにあたって、まず、タタール・ディアスポラおよびタタールスタン共和国の成立過程を概観する（各研究課題については本稿 3.3.を参照されたい）。そのうえで、タタールスタン共和国のディアスポラ支援策の理念および実施の状況を、政策文書および政策の決定や実施に関わる人物への聞き取り調査から検討する。

第 3 章ではウズベキスタン、**第 4 章**ではカザフスタン、**第 5 章**ではタジキスタンを事例に、タタールスタン共和国のディアスポラ支援策の実施状況を検討し（研究課題①）、さらに、国内の言語政策の変遷と諸言語の位置づけを概観する（研究課題②）。これらを踏まえたうえで、質問票を用いた聞き取り調査およびタタール語試験の量的・質的分析に基づき、言語選択の実態とタタール語の選択／不選択の要因と動機を考察する（研究課題③）。

終章では、各章での議論をまとめたうえで、序章で設定した 3 つの研究課題を総括する。

【図 1】中央アジア諸国とタタールスタン共和国の略地図（筆者作成）

3. 先行研究の課題点と研究課題の設定

3.1. 中央アジアにおける言語状況をめぐる先行研究

かつて存在したソ連という巨大な社会主義国家は、諸民族の友好を謳った多民族国家でもあった。やがて 1991 年 12 月にソ連は解体されたが、ソ連に暮らしたあらゆる人びとを 1 つにしたものは「ソヴィエト」や「ソヴィエト的思想」だったという指摘がある（Пилкингтон и Флинн 2001：オンライン文献）。さまざまな言語的、文化的、民族的出自を持つ中央アジアの諸民族を結びつける共通点は、30 年ほど前まではソ連国民という共通のナショナル・アイデンティティと、ロシア語という共通言語であったとも言えるだろう。しかし、ソ連からの独立と共に、ソ連国民という共通の帰属意識が失われた中央アジア諸国では、新たに国民統合の必要性に迫られることとなった。そして、独立後の中央アジア諸国における国民統合の鍵のひとつとなったものが、共通言語としての新たな「国家語」の制定であった（Landau & Kellner-Heinkele 2012:4）。国家語（государственный язык / state language）として制定されたのは、各共和国の基幹民族の民族語である。国家語の地位を与えられた基幹民族の言語（基幹民族語）は、やがて新たに独立した中央アジア諸国において国民統合の象徴として位置付けられ、今日にいたるまでその発展と推進が目指されている（小田桐 2015:2）。

中央アジア諸国の言語状況をめぐる社会言語学的研究、言語政策研究においては、長らくロシア語が諸民族の共通語として広く用いられてきた背景から、ロシア語と新たな国家語とのせめぎ合いに大きな注目が集まってきた（Сакурама-Накамура 2018:24）。たとえば、ウズベキスタンにおけるロシア語とウズベク語のパワーバランスについて論じた Мещеряков（2014:81）は、独立後に多くの民族的ロシア人をはじめとするロシア語話者（русскоговорящий）が出国したために、「ロシア語を話す少数民族に対する圧力は実際的には消滅した」としながらも、「（ウズベキスタン国内に残った）民族的ロシア人はウズベキスタン社会において「他者」であり、文化や言語などの面で基幹民族（ウズベク）とは深刻な差異が生まれている」（文中（ ）内は筆者による）と結論づけている。

中央アジア諸国における民族的ロシア人やロシア語をめぐる諸問題は「ロシア問題」（русский вопрос）と呼ばれ、彼らの言語をめぐっては、国家語に追いやられるロシア語という観点から論じられることが多かった。こうした議論の中心は、これまでに諸民族の長兄ともされるような立場にありながら、独立後にはマイノリティ民族のひとつとなってしまった民族的ロシア人の言語状況に焦点を当てた研究が中心的で、国家語とロシア語のせめぎ合いという二項対立的な視点が前提にある。もっとも、独立後に新たに定められた国家語の社会における影響力の拡大に従い、中央アジア諸国ではマイノリティの言語が困難な状況に陥りつつあるといった指摘もある（Khan 2005:79-80；Landau & Kellner-Heinkele 2012:17）。しかしながら、これらの議論においては、教育言語別の義務教育学校数の増減など、公的な統計情報を根拠としたものが多くを占めており、どの言語がどのような困難な状況にあるのか、その具体的かつ実態的な様態が見えないという課題点も指摘できる。ゆえに、ロシア語と国家語以外の諸言語に関する考察は今日にいたるまで十分ではないとも言えよう。さまざまな民族的背景を持つ人が暮らす中央アジア諸国における言語の諸相は、国家語とロシア語の対立と

いう視点だけで十分に議論できるものではなく、第３の視点たる民族語も無視できない議題のはずである。

なお、民族的ロシア人以外の諸民族の言語をめぐっては、ソ連期の工業化と都市化の文脈で論じられることが多い。中央アジア諸国では、コルホーズおよびソフホーズでの集団的な農業を目的とする集団化が行われ、その後工業化が進むと、都市部に暮らす労働者も増えていった。都市部は民族のるつぼであり、多様な言語的バックグラウンドを持つ人々の共通言語はロシア語であったことから、生活に適応するためにはロシア語の習得が必須であった。カザフスタンにおける国家建設と言語とエスニシティの関係について論じた Dave（2007）は、ソ連期のカザフスタンにおいてロシア語が諸民族に浸透した背景として「都市部の生活に適応するには必須で、大学進学や社会的地位を獲得する手段としても欠かせない言語だった」（Dave 2007:65）と指摘すると同時に、「カザフ語話者は無知のレッテルを貼られ、人前でカザフ語を話すと民族主義者と非難されかねない社会状況でもあった」（Dave 2007:112）ことにも言及している。ロシア語を習得することが社会的にも政治的にも安全であった社会的背景から、民族的ロシア人以外の民族にもロシア語が浸透していったと考えられる。また、中央アジア諸国におけるロシア語の普及について論じた岡（2004:86-87）も同様に、社会的上昇のためにはロシア語の知識が必要だったとしたうえで、非ロシア人のあいだでロシア語が普及したことについては、社会構造上やむをえなかったという意味で完全に自由な選択とは言えないが、彼らが自ら進んで学んだという側面もある、と記述している。

工業化と都市化に伴いロシア語が普及したことにより、諸民族の言語は徐々にその活力を失っていったと考えられる。「ソ連に暮らす多くの民族にとって、ロシア語の普及は最終的には伝統的な母語（mother tongue）を失うことを意味する」と Silver（1976:40）が早くから指摘していたように、ソ連末期には都市部に暮らす非ロシア人の多くはロシア語を習得し、一方でそれぞれの民族のことばを十分に操ることができない人たちも現れるようになった（岡 2004:87）。非ロシア人のロシア語化（Russification）をめぐる議論は長らくそれ以上発展することはなかったが、近年では中央アジア諸国における国家語の使用領域の拡大と同時に、諸民族のロシア語離れ（De-Russification）に関する指摘もみられるようになりつつある。たとえば、ウズベキスタン・タシュケント州に居住するロシア語話者の社会的な適応プロセスについて論じた Цыряпкина（2013:94）は、当地のロシア語コミュニティの文化的・言語的空間の狭まりを指摘したうえで、ロシア語話者が社会的・経済的に厳しい状況に置かれていることを示した。これらの文脈では、必ずしも民族的ロシア人のみならず、これまでに「ロシア語化した」（Russified）と考えられてきた諸民族の言語選択の実態にも目が向けられつつあると言える。その多くは、いかに中央アジア諸国のロシア語話者たちが国家語である基幹民族の言語を話さざるを得ない状況下にあるかを強調した事例研究ではあるものの、かつては「ロシア語化した」とみられていた諸民族のなかに、ロシア語以外の言語（国家語）を選択する例も見られるようになったことを示したという点では、新たな研究上の発見と言えよう。しかし、これらの研究においても、やはりロシア語と国家語という二項対立の枠組みが前提にある。そして、非基幹民族の言語選択の実態に関しては、「ロシア語話者」と総称されるばかりで、

それ以外の言語を話すことや、選択すること自体が想定されていないように思われる。

この背景には、小田桐（2015:3）も指摘するように、かつて中央アジア諸国がソ連の構成国だった時代に、研究遂行上の大きな制限があったことや、個別事例を扱う際にはロシア語のみならず諸民族の言語の知識も必要であったことなどが考えられる。ソ連期の言語政策を扱った議論の多くは、多くの場合において国勢調査などの統計資料や新聞記事などを用いており、これらの資料のほとんどはロシア語で書かれている。ゆえに、民族的ロシア人と基幹民族以外の、「ロシア語話者」と総称される人々に関する個別事例は十分に蓄積されているとは言い難く、民族語による資料や、聞き取り調査などから得た質的なデータなどを加えて再検討してみる価値はあるだろう。現在では研究遂行上の制限は大幅に緩和され、諸言語の学習機会も増えつつある。

3.2. 先行研究の特徴と課題点

以上を踏まえると、中央アジア地域の言語状況や言語政策を論じた従来の研究の特徴として、以下に示す 3 点が指摘できる。まず、①中央アジア全体を対象とした概括的な議論が中心的で、個々の共和国における言語状況に着目した個別事例は少なかったことが挙げられる。つまり、今日までに中央アジアという地域全体の諸相を捉えようとするマクロな研究の蓄積は多数生まれてきたが、一方でマイノリティをめぐる諸問題など、よりミクロな視点に立った個別事例の蓄積については不十分である。また、これらの議論においては、②ロシア語と国家語のパワーバランスを論じた二項対立的な視点に主軸が置かれてきたことから、ゆえに民族語をめぐる状況には焦点が当たりにくかったとも言えよう。この背景には、かつてソ連だった時代に研究遂行上の大きな制限があったことや、個別事例を扱う際にはロシア語のみならず民族語の知識も必要であったことが障壁になったと考えられる。また、③民族的マイノリティの多くはソ連期にロシア語を習得したと考えられたことから、多くの議論において彼らは「ロシア語話者」であることが前提とされるばかりで、民族のことばを選択すること自体が想定されてこなかったことも大きな課題である。ゆえに、民族語による資料や、聞き取り調査などから得た質的なデータなどを加えて再検討してみる価値は高い。

3.3. 研究課題の設定

本研究は、前述のように、これまで「ロシア語話者」という文脈で語られてきたタタールの言語選択に関心を寄せるものであるが、具体的には何が彼らをタタール語の「再」学習に向かわせているかに注目している。中央アジアという地域は複数の言語が接触する社会であると考えられるが、このような状況下においては、個々人の属する共同体や、その時々の社会状況によって、言語の位置づけや意味づけは変化していると考えられる。つまり、タタール語に関心が向くまでに、あるいはタタール語から関心が損なわれるまでには、何らかの要因と、そこから生じた動機があったと考えられる。やや短絡的ではあるかもしれないが、個人の言語習慣を大きく変える要因となりうるのは、社会における言語習慣の変化、つまり、言語政策の変化がその最たるものであろう。中央アジア諸国では、ソ連解体の直前から現在

に至るまで何度かの言語政策の大幅な方針転換が行われてきた。また、タタール語・タタール文化の保護と普及を目的として、タタールスタン共和国は世界各地のタタールに対して諸支援を展開している。タタールスタン共和国はロシア連邦の連邦構成主体のひとつでありながら、名実ともにタタールにとっての歴史、文化、政治の中心地として認識されており、各地のタタール（・コミュニティ）に対して独自のディアスポラ支援策を展開していると捉えることができる。このような取り組みも、各地のタタールの言語選択に何らかの影響を及ぼしうるものと仮定でき、居住地の言語政策とあわせて検討してみる価値があるだろう。

ここまでに挙げた理由から、①（国内外の）言語政策が言語選択に与えうる影響を検討し、さらに、②個別事例の観点から、③民族的マイノリティの言語選択、とりわけ民族語の選択／不選択の背景要因と動機を明らかにする余地があると言える。これらを踏まえたうえで、本研究では以下に示す 3 つの研究課題を設定し、言語政策が民族的マイノリティの言語選択に対してどのような影響を及ぼしうるのか、中央アジアのタタールの事例から考察する。

研究課題①　タタールスタン共和国が実施するディアスポラ支援策はどのように展開され、各地のタタールの言語選択にどのような影響を及ぼしうるのか。（国外の言語政策が言語選択に与える影響）

研究課題②　各国にて言語政策はどのように展開され、タタールを含むマイノリティにどのような影響を及ぼしうるのか。各国の言語政策において民族語を含めた諸言語はどのような位置づけにあるのか。（国内の言語政策が言語選択に与えうる影響）

研究課題③　各地のタタールの日常生活において、どのような言語がどのような場面で選択されるのか。タタール語はどのような動機から選択され、選択されないのか。（民族的マイノリティの言語選択、民族語の選択／不選択の要因と動機）

4. 研究方法

4.1. 言語法の整理

研究課題①および研究課題②は、いずれも言語政策がタタールの言語選択に与えうる影響を検討するものである。まずは研究対象国の言語政策の変遷と、言語法における諸言語の位置づけを明確にすることにより、各国の言語にかかわる諸政策のなかで、タタール語を含めた諸言語がどのような立場に置かれてきたかを整理していく。具体的には、言語法を中心に、必要に応じて行政文書等の一次資料を用いる。研究課題①については、タタールスタン共和国が取り組むディアスポラ支援策の決定や実施に関わる人物への聞き取り調査も併せて実施することで、その理念と現状をより詳細に整理する。

4.2. 質問票を用いた聞き取り調査

研究課題③は、各地のタタールがどのような状況下でどの言語を選択するのか、どのような動機からタタール語の選択／不選択に至るのかを検討するものである。多言語空間において複数の言語がどのように使い分けられているかを検討するにあたっては、さまざまな社会

的属性の個々人に対する調査の実施が有効と考えられる。本研究では、いくつかの場面における言語選択（ドメイン）を問う目的で、さまざまな社会的属性の個々人に対する質問票調査を実施する。また、研究課題②に関連して、言語政策に対する評価や、特定の言語（居住国の国家語やロシア語など）に対する認識に関しても質問項目としたい。

なお、本研究では場面単位の言語選択といった量的分析が可能な側面のみならず、タタール語の選択／不選択の要因と動機という質的な側面からの検討も課題としている。言語選択の要因や動機を明らかにする目的で、質問票に対する回答に基づいた詳細な聞き取り調査も併せて実施する。聞き取り調査で用いる質問票は、日常生活や社会生活における言語選択と言語使用に関連する全 25 問から成り立っており、具体的には 5 つの項目に分けることができる。

① 基本情報（全 7 問）
　氏名、性別、生年、職業、自身と両親の民族籍、出生地、居住地
② 言語的背景（全 8 問）
　教育言語（MoI）、家庭内言語、最も得意とする言語（L1）、「母語」と捉える言語
③ 言語選択・言語使用（全 6 問）
　具体的にどのような場面でどの言語を選択するか
④ 言語に対する認識（全 3 問）
　いくつかの言語に対する認識や意見など
⑤ 取り組みへの評価（全 1 問）
　自由記述（言語政策や社会状況、タタール語の選択／不選択に関する意見など）

なお、質問票を用いた聞き取り調査はウズベキスタン 88 名（2013 年 4 月～2014 年 2 月調査実施）、カザフスタン 77 名（2016 年 2 月～10 月調査実施）、タジキスタン 76 名（2018 年 12 月～2019 年 8 月調査実施）を対象とし、実施した。

4.3. タタール語の文法・語彙知識を問う簡易試験の実施

また、研究課題③で問うタタール語の選択／不選択の動機には、その時点でのタタール語の知識や運用能力も大きく影響すると考えられることから、調査対象者全員のタタール語能力を数値化する目的でタタール語の文法・語彙の知識を問う簡易的な試験も実施する。これについては第 1 回タタール語・タタール文学オリンピックの予選試験（在外タタールカテゴリー）より抜粋した全 20 問から成り立っており、具体的には以下のタタール語の知識や能力を問うものである。

① 語彙：類義語、反対語、適切な語彙の選択（全 9 問）
② 文章の並び替え（全 5 問）
③ 短い文章を読んで正しい答えを選択する（全 1 問）

④ 文法エラーを正しい形に直す（全３問）
⑤ 民族料理や伝統行事の名称を知っていれば回答可能な文章題（全２問）

なお、第１回大会予選試験(在外タタールカテゴリー)の受験者 87 名の平均正答率は 58.2%、予選通過者 13 名の平均正答率は 86.5%、タタールスタン共和国のタタール語学校で学ぶ 8 年生 350 名の平均正答率は 95.5%であった。つまり、何らかのタタール語教育を受けた経験をもつ者にとっては、比較的易しい内容の試験だったと言えよう。

5. 研究対象

5.1. 研究対象者の設定

「タタール」（*Татарлар* / Tatars）という民族名称は、用いられる時代と場所によって指す対象が異なり、かつてはモンゴル系やツングース系など様々な民族を指す名称でもあった。西山（2005:322）によると、この民族名称は中世のアラビア語およびペルシア語文献や西欧・ロシアの文献において、ジョチ・ウルスの諸民族を広く総称する語であった。そして、帝政期にはテュルク系のムスリム諸民族を広く総称する民族名称として汎用され、近代ではアルタイ、カザフ、アゼリー（アゼルバイジャン人）など異なる民族とみなされる人々もタタールと呼ばれていた。

本研究が対象とする時代は現代であるから、対象とするのはもっぱら現代の文脈におけるタタールである。その居住地域はカザン（タタールスタン共和国の首都）を含む沿ヴォルガ地域が中心的ではあるものの、今日ではロシア全域のみならず中央アジア諸国といった NIS 諸国を中心に、フィンランドやトルコ、中国西部（新疆ウイグル自治区）といった周辺諸国や地域にまで広がる。タタール語（*Татар теле* / Tatar language）という語にも同様のことが言え、現代の文脈における「タタール語」はヴォルガ・タタール（*Идел-Урал татарлары* / Volga Tatars）およびミシャル・タタール（*Мишәр татарлары* / Mishar Tatars）の言語と、これらと近い関係にあるシベリア・タタール（*Себер татарлары* / Siberian Tatars）の言語を相対的に指すことが多い（菅原 2005：322-323）。したがって、本研究においても「タタール」および「タタール語」はこれらの定義に則るものとする。

なお、現代の文脈におけるタタールという民族がソ連期以降に規定されたように、「民族」は近代以降に生み出された概念である。民族について、西川（2002:95）は「きわめて多義的で矛盾に満ち、ほとんど定義不可能な概念」であり、近代以降に発明された幻想だとする。一方で、塩川（2004）は民族を「単に『恣意』『虚構』『幻想』として片付けるだけでは、当事者の意識の即した内在的な理解ができない」（塩川 2004:256）としたうえで、「『民族』『言語』をはじめとする諸カテゴリーの歴史的な可変性をおさえながら、かといって単純にそれを虚妄として片付けるのでもなく、歴史のなかで形成・再形成され、しばしばあたかも強固な実態であるかに立ち現れているものとしての把握が必要」（塩川 2004:257）であると指摘する。タタールという民族的な概念はきわめて新しく、その歴史的な経緯を考えればソ連期に恣意的に画定されたものであるとも言える。とはいえ、現代において「タタール」である

と宣言し、帰属意識を持つ人々が存在する以上、彼らの民族観や認識を幻想だとか恣意だと切り捨ててしまうと、まさに塩川（2004:256）が指摘するように「当事者の意識の即した内在的な理解ができない」であろう。本研究はこれを踏まえたうえで、今日の「タタール」のありかたを言語選択という視点から考察するものである。

本研究が対象とする中央アジア諸国における「民族」の概念は、ソ連期に創出されたものを概ね引き継いでいるものと考えられる。ソ連の多民族性については、ソ連政府が民族を制度化し創出することで、多民族国家に仕立て上げていったという Brubaker（1996:49-60）の指摘がある。現実的にさまざまな歴史的、宗教的、伝統的な出自をもつ集団を領域内に抱えていたソ連にとって、この多様性は平等な社会主義社会の実現を目指すにあたって不安材料であったと考えられる。ゆえに、ソ連は諸集団をいくつかの民族に分類し、文化や言語を振興しながらも管理し、そしてやがて固有の文化や言語をもつ「民族」が創出されていった。とはいえ、実際的には多くの「民族」は居住地域の拡大とともに他の民族集団との文化接触や混血を繰り返して形成された範疇であり、タタールを含む諸民族はより流動性を持った集団であったと考えられる。では、どのように民族の境界を明確化および固定化するかと言えば、身分証に記載される民族的な帰属「ナツィオナーリノスチ」（национальность）である。ソ連およびロシアにおける民族境界の画定について論じた伊賀上（2008:229）は、これに「民族籍」という訳語を与えたうえで、ソ連初期には「実際には、「ロシア人」と「非ロシア人」を区別する厳密な分類基準があったわけではなく、当人の自意識のみならず、民族学者や行政関係者の多分に恣意的な判断によって、住民の「民族籍」が決定されていった」と説明する。民族籍の概念自体は、1932 年にソ連当局が国民の移動、職業、住居、教育を管理すると決定された際に導入された国内パスポート（внутренний паспорт）に端を発するものである。国内パスポートには、所持者の民族が記載される欄があった。ムヒナ（2017:45）によると、国内パスポートは「本人確認書類として使われるようになり、大学への進学、就職などの面では、差別を受ける民族と優遇措置を受ける民族が現れ、徐々に民族意識が強調させられた」という。

なお、この「民族籍」の概念と制度は独立後の中央アジア諸国においても引き継がれ、個々人の民族籍は国内身分証などに記載されている。国内身分証は 16 歳または 18 歳から取得する決まりとなっており、ここで記載される民族籍は多くの場合において自己申告制である。なお、出生時には暫定的に親の民族籍が引き継がれ、両親の民族籍が異なる場合はどちらかの民族籍が引き継がれる（親が決定する）ものの、規定の年齢で自身の帰属民族を自己決定する機会がある。前述のとおり、ソ連初期には恣意的に決定されたこともあった民族籍であるが、現代の中央アジア諸国においては、制度的には自己決定に委ねられていると考えられる。したがって、本研究においても、研究対象者の設定にあたっては基本的にはタタールの民族籍を持つ個人を対象としたい。

ただし、近年では就職や進学の際に有利になるという条件から、戦略的に基幹民族の民族籍を選択する者も少なからず存在するという指摘もある（中村 2016:33）。こうした個人を研究対象から排除しないために、本研究においては、①本人がタタールであるという意識を持ち、②他者からもタタールであると認識され、かつ③三親等以内にタタールの民族籍を持つ

者に限って、基幹民族の民族籍を持つ場合であってもタタールとみなし、研究対象者とする。

5.2. 調査対象者の設定

質問票を用いた聞き取り調査によって明らかにしたいのは、各地のタタールの言語選択、とりわけタタール語の選択／不選択の要因と動機である。調査対象者の選定にあたっては、民族籍（ナツィオナーリノスチ）がタタールであることが必要条件であり、年齢や性別、信仰、社会的所属などは条件としない。

各地の民族団体等に把握され、名簿等が入手可能な個々人は、いずれも団体の活動に多かれ少なかれ関わっていることから、前提としてタタール語を知っている、またはタタール文化に愛着を持っている個人に限定されてしまう可能性が考えられる。ゆえに、無作為抽出に必要な名簿を確保できない社会集団が調査対象であるときに、調査対象者確保の有用な方法とされる、雪だるま方式（snowball sampling）を用いての選定を実施する。

なお、タタールの大多数はイスラームを信仰していることから、その倫理観から同性の知人・友人を紹介される可能性が想定され、その場合は男女比に大きな偏りが生じることが考えられる。調査対象者の男女比、年齢、所属の偏りを軽減する目的で、調査対象者が指定した異性の同居家族に次の調査対象者を紹介してもらうこととする。

5.3. 研究対象地域の設定

本研究は、言語政策が民族的マイノリティの言語選択に与えうる影響と、民族的マイノリティの民族語の選択／不選択の要因と動機を、中央アジアに居住するタタールを事例に検討するものである。かつてはソ連を構成する共和国として歴史を歩んだ中央アジア諸国であるが、独立後の言語政策はそれぞれ異なる方針で展開されている。ゆえに、独立後の諸言語を取り巻く環境と、その背景を検討するにあたって適したフィールドであると言えよう。

官製民族団体である全世界タタール会議（*Бөтендөнья татар конгрессы*）は、世界のタタール人口を 600 万人程度と見積もる。最も大きなタタール人口を抱えるのはロシアの約 531 万人（うちタタールスタン共和国に約 201 万人、いずれも 2010 年）であるが、ロシア国外のディアスポラについては、**カザフスタン**（約 20 万 400 人、国内人口に占める比率 1.1%：2020 年）と**ウズベキスタン**（約 19 万 5,000 人、同 0.7%：2019 年）で最も人口が多い。カザフスタンとウズベキスタンはロシア国外で最も大きなタタール人口があることから、タタールスタン共和国のディアスポラ支援策のなかでも多額の予算が割かれるとともに、取り組みの成果が期待されている。このようにタタールの人口規模は同程度の両国ではあるが、国内の言語状況はそれぞれ異なると考えられる。Шипилов（2014:70-73）によると、ウズベキスタンの言語法ではロシア語に法的地位を与えていないのに対し、カザフスタンでは公用語（официальный язык / official language）に制定されていることから、少なくともロシア語をめぐるスタンスはそれぞれ異なると言える。ゆえに、両国では国家語のプレゼンスの拡大程度が異なることも予想され、ロシア語と国家語のパワーバランスの差異とタタールの言語選択の関係性を比較検討するにあたっても適した対象と言えるだろう。

一方で、中央アジア諸国のなかでタタール人口・国内人口に占める比率ともに最も小さい国が**タジキスタン**（約 6,500 人、同 0.1%：2010 年）である。タタールスタン共和国が公開する年次報告書を見てもこれといった支援の実施は報告されておらず、人口規模と政策の実施状況ともに前述の 2 カ国とは対極の状況にあると言える。ゆえに、タタールスタン共和国によるディアスポラ支援策の影響を検討するにあたって、適した対象である。また、多くがテュルク諸語に分類される言語を国家語とする中央アジア諸国のなかでは、唯一テュルク諸語には分類されないタジク語を国家語としている点でも特徴的と言える。なお、本研究が対象とするタタール語はテュルク諸語に分類され、中央アジア 4 カ国において国家語に制定されるテュルク諸語（ウズベク語、カザフ語、キルギス語、トルクメン語）とも多く共通点を持つ。

なお、カザフスタン同様にロシア語に公用語の法的地位を与える**キルギス**（クルグズ）もまた、特にカザフスタンとの比較対象として最適である。国内のタタール人口は 2 万 7,000 人（国内人口比率 0.43%：2019 年）と小規模ではあるものの、中央アジア諸国のなかでは最も多くのタタール民族団体が設立され、活動を展開している。国内の民間民族団体の活動が言語選択に与える影響を検討するという文脈においても魅力的なフィールドと言えよう。しかし、複数のタタール民族団体が激しく対立し合う状況にあることから、横断的な調査協力を仰ぐことは現状では困難である。また、キルギスと同程度のタタール人口を持つ**トルクメニスタン**（約 2 万 2,000 人、同 1.2%：2010 年）は、人口規模の観点からキルギスと比較するにあたって適当な対象であるものの、政治的制約により国内情報は非常に限られており、また、調査の実施そのものも困難な状況である。

これらの条件に鑑みて、本研究では**ウズベキスタン**、**カザフスタン**、**タジキスタン**の 3 カ国を研究対象地域と設定し、言語政策がタタールの言語選択に与えうる影響とタタール語の選択／不選択の要因と動機に注目する。

6. 分析方法

複数の言語が使い分けられる社会においては、その社会的状況や特徴によって言語に対する態度や、価値づけ、意味づけは一定したものではなく、可変的なものと仮定できることに言及した。これを踏まえると、社会における言語習慣の変化をもたらそうとする言語政策の転換は、その受け手である国民や特定の言語の話者の、特定言語に対する態度や意味づけにも変化をもたらすものと考えられる。つまり、言語政策の転換が個々人（の言語選択や言語に対する意識の変化）に作用を及ぼした結果として、特定の言語を選択する、選択しないという行動に結びつくと仮定することもできる。

ここでは言語政策の転換を言語選択に変化をもたらす要因のひとつとして仮定するわけだが、ある要因（始まり）があり、意識的にしろ、無意識的にしろ、自身の言語選択を変化させうる動機が生じ、現在の言語状況に落ち着く（終わり）という一連の流れは、プロセス的とも言えるだろう。このようなプロセス的な特性をもった対象を検討するにあたっては、状況的分析に長けた量的分析のみならず、その状況にいたる背景的分析に長けた質的分析も複

合的に用いるのが適切であると考える。研究対象がこのようなプロセス的な特性を持つ場合に有効な分析手法としては、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach：M-GTA）が挙げられる。M-GTA は、調査によって得られた質的データから、人と社会との、あるいは人と人との相互作用や、そのプロセスと変化を説明するほか、予測する理論の生成を目的とした分析方法である。質的研究にはさまざまな種類や方法論があるが、M-GTA は質的調査によって得られた個別の事例から共通する要素を抽出し、ある事象や現象の構造や骨組みを説明できるモデル（理論）を生成することを最終的な目標としている。木下（2003;2007）に基づく基本的な方法論は以下に示すとおりである。

① 主に聞き取り調査を通じて、調査対象者から「言語選択」や「言語政策」にまつわる語りを収集し、これらのデータに解釈を加えながら帰納的推論を重ねていく。
② ①に頻出し、重要と思われる複数の〈概念〉を抽出し、これらをより大きな【カテゴリー】へと統合していく。
③ 次の調査対象者の語りに対しても、新たな解釈を加えながら①と②を繰り返す。
④ ①～③で抽出した概念からモデル（理論）を構築していく。

M-GTA は質的データに密着した分析を行うことができ、実証的な仮説を生成することに優れているという特徴がある。また、方法論が体系化されているという点でも特徴的で、とくに社会的相互作用を含んだ分析において有効であるとされている。本研究は中央アジア 3 カ国のタタールの言語選択、とりわけタタール語の選択／不選択に関心を寄せるものである。タタール語の選択／不選択に至るまでには何らかの動機があり、動機を引き起こす要因として、社会的な変化が作用していると仮定できることから、M-GTA を用いた分析が有効だと判断された。

7. 結論

7.1. 研究課題①　国外（タタールスタン共和国）の言語政策が言語選択に与えうる影響

タタールスタン共和国の言語政策については主に第 2 章で、その受け手である各地のタタール文化センターにおける活動実態や参加者の状況については第 3 章から第 5 章の第 2 節で検討した。

帝政期には多くのタタールが各地で商人として活躍したことから、その居住地域は当初から広範囲にわたったが、20 世紀初頭に勃発したロシア革命によりタタールの移動はさらに勢いを増し、居住範囲がよりいっそう拡大することに繋がった。今日におけるタタール人口の大部分はロシア国内に居住するが、このような歴史的背景から広範囲に分散しており、タタールスタン共和国以外の地におけるタタールはいずれも人口的にマイノリティである。タタールスタン共和国は、その歴史的な背景と域内のタタール人口の規模から、自らをタタールにとっての「歴史的故郷」であると自負し、ロシア国内外に住まう民族同胞（タタール・ディアスポラ）に対する物質的および金銭的な支援を実施するようになった。その背景にある

のは、グローバル化による人やモノ、思想や価値観の自由な流入とともに、民族アイデンティティや民族文化は均質化が進むのではないか、という危機感である。このことから、タタールスタン共和国が実施する国家プログラムの枠組みのなかではロシア国内外のタタールを対象とし、タタール語やタタール文化の保護と継承の促進を目指したプロジェクトも展開されることとなった。これらの活動を展開するにあたって、重要な拠点となったのは世界各地に設置されたタタールスタン共和国代表部や、ソ連末期にタタールスタン共和国による支援策とは別の文脈で設置されたタタール文化センター等の民族団体施設であった。各地のタタール文化センターの多くは、ソ連期に民族文化および民族語が抑圧されたという認識から、これらの復興を主たる目的としてソ連期の末期に設立されたという背景を持つ。近年のグローバル化の文脈のなかにおいては、民族文化および民族語の継承を促す拠点となるとともに、それぞれの国や地域の社会情勢に合わせて、他者との平和的共存も強調されている。

独立後の**ウズベキスタン**ではウズベク語やウズベク文化を中心とした様々な改革が行われてきた。タタールとウズベクには文化的にも多くの共通点があるという認識から、ウズベクを中心とする社会への変貌とともに、自身や子および孫世代のウズベクへの同化に対する不安を抱くタタールも少なくない。タシュケントのタタール文化センターが運営するタタール語講座や民族アンサンブルに参加するのは、同化に対する危機感から、タタールに独特のもの、よりタタール的なものを求める人々であった。民族アンサンブルの参加者は、タタール語で歌うことやタタールの伝統衣装を着用することを通じて自身のタタールらしさを再認識すると語っており、タタール文化センターはタタール語で話すことや、タタール文化に親しむことによってタタールらしさを体感する場として機能していることが示された。

また、**カザフスタン**では、カザフ語とロシア語のみならず、英語を加えた 3 言語の使用を促進する「3 言語一体」政策が近年展開されている。とりわけ若い世代のタタールには 3 言語の習得を当然と捉える傾向がみられ、競争社会のなかで優位に立とうと、さらに多くの言語に関心が向きやすい状況にある。ヌル＝スルタンのタタール文化センターは、より多くの言語を学びたいと願うタタールにタタール語という選択肢を与える場であるとともに、「カザフスタン人」としての意識をより強く持ってきたタタールにとっては「カザフスタンのタタール」として、民族的な認識や所属感を強める場として機能していると言えよう。

タジキスタンにおいても、近年ではタジク語を中心とした言語政策が推進されようとしているが、ロシア語は現在も社会のさまざまな側面で利用されている。ロシアに依存せざるを得ない経済状況から、諸政策の普及は限られたものとなっている可能性が指摘できる。ドゥシャンベのタタール文化センターに通うのは、経済的な理由からタタールスタン共和国に進学や就労の機会を求める個人で、タタール語を学ぶことで機会を拡大しようと考えていた。彼らの多くは、タタール語やタタール文化の知識を持たなかったために、自身の名と書類上の民族籍という表面的な要素だけがタタール的だと自己評価する。ドゥシャンベのタタール文化センターにおけるいくつかの事例は、タタール語や伝統音楽、伝統舞踊の経験が内面的なタタールらしさを育むきっかけとなっている可能性を示した。他方で、センターにおけるタタール語講座における選択肢の少なさからタタール語の学習を諦めてしまう事例も確認さ

れた。

タタールスタン共和国による支援を受けた各地のタタール文化センターの運営状況にはばらつきがみられるが、各国の事例は、その存在そのものを以ってタタール語やタタール文化を学ぶという選択肢を創出していることを示している。さまざまな背景から「タタールらしさ」を求める人々は、タタール文化センターを訪れ、タタール語やタタール文化を学ぶが、その運営状況によっては学びを諦める事例も見られることから、タタール語の学習機会は各人の居住地に所在するタタール文化センターの運営状況に左右されてしまう。このことからも、タタールスタン共和国による支援によってタタール文化センターの学習環境が整備されることは、各地のタタールがタタール語を選択するうえでも重要な要素のひとつであると言えるだろう。少なくとも、各地のタタール文化センターは、民族籍はタタールだが、タタール語やタタール文化の知識・経験を持たなかったために、民族的な自己同定に葛藤する人々の受け皿となっていると結論づけることができる。

また、各地の民族文化センターへの支援のほかに、カユーム・ナスィーリー・インスティトゥティ、オンライン・タタール語学習システム、国際タタール語オリンピック、カザン連邦大学におけるディアスポラ学生プログラムなどがタタールスタン共和国国家プログラムの枠組みで展開されている。これらの取り組みはいずれも若い世代の参加や利用を念頭に置いており、タタール語やタタール文化（という選択肢）の存在を大々的にアピールするものでもある。その波及力はタタールのみならず、非タタールにまで及んでいた。タタールの多くが居住地で民族的および言語的にマイノリティであるという文脈を考慮すれば、タタール語オリンピックやディアスポラ学生プログラムでタタールの歴史、文化、経済の中心地とされるカザンを訪れ、タタール語や伝統文化の継承に熱心な世界各地のタタールと交流することは、ある種の感動的な出来事となる。このような身体的・感覚的な経験は参加者にタタールとしての民族性を強く意識させるだけにとどまらず、居住地域を超えた民族同胞意識や、タタールスタン共和国がタタールの中心地であるというゆるやかな認識をより強いものとさせるにも十分であると考えられる。参加者の多くはタタール語やタタール文化に高い関心を持つ若者であることから、いずれは地域の民族団体などで指導的な立場に立つことも多い。大会やプログラムへの参加経験から得た認識はやがて各地のタタール社会や家庭に還元され、再生産されていくであろう。ただし、タタール社会への還元にあたっては、やはり、その窓口となる各地の民族文化センターが整備されていることが重要であることを指摘しておく。

7.2. 研究課題②　国内（居住国）の言語政策が言語選択に与えうる影響

本研究が対象とする 3 カ国の言語政策については、第 3 章から第 5 章の第 3 節で検討した。以下では、調査結果（各章の第 5 節）もふまえたうえで、対象国ごとに総括する。

ウズベキスタンでは、1992 年に制定された共和国憲法と、1995 年に制定された言語法によってウズベク語が唯一の国家語であることが規定されている。それ以前の言語法ではロシア語が民族間交流語であるとされたが、独立以降はロシア語の法的地位をめぐって頻繁に法改正がなされてきた経緯がある。最終的にはロシア語の法的地位を明記する文言そのものが

削除され、ウズベク語が唯一の国家語であるとともに、他の民族および部族の言語の使用が保障されると明記されるにとどまった。ロシア語をめぐる法改正の動きは、ウズベク・ナショナリズムの文脈で論じられることが多い。実際に、近年では義務教育におけるウズベク語教育時間数やウズベク語学校数の増加、公務員に対するウズベク語習得の義務付けなども行われていることから、ウズベク語の使用範囲の拡大が目指されていると解釈できる。とりわけ、学校教育の場ではウズベク語およびウズベク文化を中心とした教育課程を通じて「ウズベキスタン国民」の意識形成が急がれているといった指摘もみられ、ウズベク語は国家建設においても重要な要素のひとつとなっていると考えられる。

本研究が調査対象としたタシュケントのタタールの多くはロシア語話者であり、特に 30 代以上は時代的背景から一様にロシア語で教育を受け、ロシア語を第一言語とする。しかし、独立後に義務教育を受けた 10 代および 20 代のタタールのあいだでは、世代が若くなるにつれウズベク語での教育を選択し、同時にウズベク語を第一言語とする者が増える傾向がみられた。世代による教育言語および第一言語の変化は、独立後にウズベク語が唯一の国家語と規定され、その使用範囲が年々拡大されてきたことが背景にあると解釈できるだろう。つまり、社会における諸言語の位置付けの変化は、教育言語の選択にも少なからぬ変化を及ぼしている。今日では若い世代ほどウズベク語を得意とし、実際には家庭内においてもある程度のウズベク語の使用が認められるが、一方で家庭内ではウズベク語を使用しないとする回答が世代を問わず確認された。その背景には、ウズベク語を「ウズベクの民族語」や「他者の言語」と捉えた調査協力者の発言からも読み取れるように、ウズベク語に対するある種の反発や抵抗があり、これは近年のウズベク語の使用範囲の拡大と同時に進むロシア語の使用範囲の縮小に起因するものと考えられる。これまでロシア語を話すこと、あるいはウズベク語を話さないことによって、文化的に多くの共通点を持つウズベクとの民族的な境界を見出だしていたタタールのあいだでは、ウズベクの民族語（ウズベク語）を話すことは民族的な境界を無くすこと、あるいは、ウズベクに同化することだという認識が広がっていったと解釈できる。

ウズベクとタタールの民族的な境界を生み出す要素には、言語のほかにも、名や料理、衣装、文様、音楽、伝統行事などが考えられるが、「ウズベク語とタタール語は近い」とする複数の発言は、ウズベク語と共通する文法や語彙の知識を通じてタタール語に関心が向きやすくなっている可能性を示すものとなろう。つまり、タタール語は、ウズベクへの同化に対抗し、自身がタタールであることを表示したり、認識を深めるための一手段として注目されつつあるわけだが、その背景要因のひとつとして、言語政策がウズベク語を中心とした方向に舵を切ったことが指摘できる。

カザフスタンでは、1995 年に改正された共和国憲法と 1997 年に制定された言語法によって、カザフ語が国家語、ロシア語が公用語であることが規定されている。そして、2007 年に発表された国家発展戦略「カザフスタン 2030」のなかで、「国家語としてのカザフ語、民族間交流語としてのロシア語、グローバル経済への統合のための英語」という 3 つの言語を重視する方針を示したことで、カザフ語とロシア語を重視する従来の路線からは大きく踏み出

すこととなった。この「3 言語一体」政策は、カザフ語やカザフ文化を柱としつつ、さらにロシア語と英語をも解する「カザフスタン国民」というナショナル・アイデンティティの形成が進められるきっかけとなったと考えられている。とはいえ、諸言語の振興を目指した国家プログラムでは、ロシア語や英語に関するものよりもカザフ語に関する目標が多く、そして細かく定められており、たとえばメディアにおけるカザフ語の使用率目標や、国家語（カザフ語）を使用する話者数目標が年々高められてきた（詳細は 4.3.3.～4.3.7.を参照）。このような姿勢からは、社会におけるカザフ語の地位と機能の拡大が目指されていることが読み取れ、カザフ語が「カザフスタン国民」のナショナル・アイデンティティ形成のなかでも非常に重要な言語として位置づけられていると解釈できる。ただし、現時点ではロシア語は憲法および言語法において公用語に位置付けられており、今後も国内の民族政策的にその地位に大幅な変化があることは考えにくい。

本研究が調査対象としたヌル＝スルタン（調査当時はアスタナ）のタタールは、タシュケントの事例と同様に、40 代以上は一様にロシア語を教育言語とする一方で、30 代以下は世代が若くなるにしたがって国家語であるカザフ語を教育言語とする傾向がみられた。とりわけ 10 代と 20 代の調査協力者は半数以上がカザフ語を教育言語としており、カザフ語、ロシア語、英語の 3 言語をバランスよく習得した人物を「理想的なカザフスタン人」と捉えている。すでに 3 言語を習得することが前提となりつつある、カザフをマジョリティとする競争社会のなかで、マイノリティであるタタールのなかにはさらに多くの言語を習得することで自身の優秀性を示したいとする事例も多くみられた。タタール語の学習はカザフ語との言語的類似性が足がかりにもなっているが、その背景には多言語話者として「”さらに”理想的なカザフスタン人」を追い求める風潮もある。こうした思想の浸透と教育言語のカザフ語化は、2007 年に「カザフスタン 2030」が発表されて以降の言語・教育政策の転換に影響を受けたものと解釈できるだろう。タシュケントの事例と大きく異なるのは第一言語である。ヌル＝スルタンの事例では、ロシア語で教育を受けた者はいずれもロシア語を第一言語とするが、カザフ語で教育を受けた 30 代以下の者のなかにはタタール語を第一言語とする回答も多くみられた。カザフ語で教育を受けながらタタール語を第一言語だと回答した協力者からは、言語的な類似性から学習および理解が容易だとする語りも多数聞かれたが、そのうち全員が市内の日曜学校やタタール語講座への参加経験を持っていたことも特筆に値する。つまり、カザフ語との言語的な類似性からタタール語へのアクセスが容易になったことだけでなく、ヌル＝スルタン市内におけるタタール語の学習機会の多さがこの結果につながっていると考えることもできるだろう。また、カザフ語に対する反発や抵抗はほぼ見られず、とくに 30 代以下の若い世代ほど「カザフスタン人の言語」と捉える傾向がみられた。近年の言語政策はカザフ語を中心としたものではあるが、ロシア語は依然として公用語に位置付けられており、法的にその使用を妨げられることはない。ロシア語の使用を妨げない政策的な決定は、タタールの大多数を含むロシア語話者の警戒感や不満感を抑えながら、近年展開される「3 言語一体」政策に巻き込むことに繋がっていると結論づけられる。

タジキスタンでは、1994 年に制定された共和国憲法でタジク語を国家語、ロシア語を民族

間交流語と規定している。ただし、2009 年に制定された言語法ではタジク語を国家語と規定するだけで、ロシア語の法的な位置づけは明記されなかった。1997 年の時点でタジク語が「国家語としてふさわしい使用状況にない」ことが批判されていたが、1992 年から 1997 年まで続いた内戦とそれに伴う社会的・経済的な疲弊により、法整備が進められたのは独立後しばらくの時を経てからであった。タジク語を国家語としてふさわしい使用状況にすることを目指し、現行の言語法はすべての国家文書と公文書でタジク語のみが使用されることを原則とするなど、ロシア語の使用を事実上廃止するものとなっている。近年のタジク語とロシア語の位置づけをめぐる一連のできごとからは、タジキスタンがタジク語の社会的機能と国家語としての権威をより強める方向に舵を切ったことは指摘できるが、その目指す先はあくまでタジク主体の国づくりであって、単純にロシア離れと言い切ることはできない。加えて、このようにタジク化を目指した言語法が 2009 年に制定されながら、そのおよそ 10 年後に実施した聞き取り調査（2018 年から 2019 年にかけて実施）では、多くの調査協力者が「日常生活はロシア語だけでも支障がない」と回答した。その背景にはロシアに依存せざるを得ない経済状況があると考えられ、ゆえに制定した諸政策の普及も非常に限られたものとなっている可能性が指摘できる。

本研究が調査対象としたドゥシャンベのタタールのあいだでは、タシュケントやヌル＝スルタンの事例と同様に、40 代以上は一様にロシア語を教育言語とする一方で、30 代以下は世代が若くになるにしたがって国家語であるタジク語を教育言語とする者が増える傾向がみられた。なお、30 代以下の若い世代は教育言語を問わず全員がタジク語での会話が可能と回答している。40 代以上であってもタジク語での日常会話が可能とした調査協力者は多く、その比率はタシュケントとヌル＝スルタンにおける国家語の事例よりも高い結果となった。タタールは内戦前後の国外流出が多かった民族のひとつであることから、移住することなく現在もタジキスタンに居住するタタールは元々ある程度のタジク語の運用能力あったと考えることもできるが、多くの調査協力者からは、「内戦後にタジク比率が高まった社会のなかで生き抜くにはタジク語を話す必要があった」と語られた。また、ソ連期にタタール語を聞き話した記憶を語る協力者も少なくなかったが、内戦で親族の多くが国外に移住したことから親族間の交流が断絶し、タタール語を選択する機会が失われていったと考えられる。つまり、タジキスタンの場合は、言語政策の転換以前に、内戦という特殊な出来事により言語選択をめぐる状況は非常に大きな影響を受けたと結論づけることができよう。また、すでに指摘したように、タジク化を目指した諸政策の普及が非常に限られたものとなっている背景から、結果的にロシア語の使用が妨げられず、ロシア語話者からの反発が却って抑えられている可能性もある。

ここまでの議論を総括すると、言語政策の転換は各地のタタールの言語選択にいくつかの大きな変化をもたらしたと言えるだろう。ウズベキスタンのタタールのあいだではウズベク語を中心とした言語政策によって同化への危機感が生まれ、そしてカザフスタンのタタールのあいだでは 3 言語話者を求める言語政策によってより多くの言語を習得する動機が生まれ、結果的にタタール語に関心が向くことにつながった。また、タジキスタンも含むすべての研

究対象国では、独立以降の国家語を中心とした言語政策への転換により、これまでロシア語話者が多数であったタタールのあいだに国家語で教育を受け、第一言語とする若い世代を増やしている。

7.3. 研究課題③　タタールの言語選択：タタール語の選択／不選択の要因と動機

本研究が対象とする 3 カ国に居住するタタールの言語選択の要因と動機については、第 3 章から第 5 章の第 5 節および第 6 節で検討した。以下では、調査結果および M-GTA を用いた分析をふまえながら対象国ごとに総括する。なお、タタール語の選択／不選択の要因と動機を説明する最小単位である概念は〈 〉、概念をまとめたカテゴリーは【 】で示す。

	【カテゴリー】	〈概念〉
タタール語を選択	葛藤から生じた民族回帰	ウズベク語化する社会における疎外感 ウズベクへの同化の危機感 タタールであることを宣言したい欲求
	社会的要因から生じた学習動機	ウズベク語との言語的類似性から生じた興味 多言語話者に対する時代の要求 言語学習に対する心理的障壁の少なさ
	家族の紐帯	親族間交流のための言語 民族アイデンティティの保持と継承 民族性の継承のための言語
不選択	民族語の社会的機能の欠如	タタール語が話せなくても生活可能な現状 ロシア語主義的な考え タタール語を学ぶ機会の欠如

【表1】タタール語選択・不選択の動機とその要因（ウズベキスタン・タシュケント）

ウズベキスタン（表 1 参照）では、12 の概念が生成され、これらは 4 つのカテゴリーにまとめられた。ウズベキスタンにおいては、社会のさまざまな側面における急速なウズベク語の使用範囲の拡大が進められているが、伝統的にロシア語話者が多いタタールのなかには、ウズベク語化が進む社会のなかで疎外感やウズベクへの同化の危機感を抱く者も現れるようになった。「ウズベクではなくタタールである」と民族的な意識を強め、そのことを他者に対しても宣言したいという欲求や動機からタタール語学習への関心が高まりつつある。つまり、【葛藤から生じた民族回帰】を背景要因にタタール語が選択されている。なお、20 代以下の若年世代の調査協力者のうち、7 割程度はウズベク語での日常会話が可能であると回答しており、ウズベク語との言語的な類似性からタタール語を含むテュルク諸語への関心が高まりやすくなった可能性も指摘できる。ウズベク語の知識を持つ調査協力者のあいだには、同様にテュルク諸語に分類されるトルコ語の学習率も高くなる傾向が見られた。若年世代のあい

だでは中国語や英語など世界的に広く話される言語の学習も一般的で、多言語話者となることが前提となりつつある。つまり、社会的に多言語話者が要求される状況も大きな要因と考えられ、【社会的要因から生じた学習動機】もまた、タタール語を選択する背景要因のひとつとなっている。また、40 代を除くすべての世代の 3 割から 5 割の調査協力者は家庭内でタタール語を使用すると回答した。つまり、一部の家庭ではタタール語が家族間あるいは親族間の交流の場で選択されてきたと考えられ、それが明確な意図を持ったものかどうかはさておき、結果的に【家族の紐帯】をもたらす背景要因となっている。

一方で、現在のウズベキスタンではウズベク語とロシア語の 2 言語を習得していれば日常生活や進学、就職に大きな困難があるわけではなく、タタール語はあくまでプラスアルファの存在に過ぎない。タタール語を知らないことで社会的な不利益を受けることも考えにくく、【タタール語の社会的機能の欠如】を要因にタタール語が選択されない事例も見受けられた。

	【カテゴリー】	〈概念〉
タタール語を選択	自身の社会的価値づけ	さらなる理想的なカザフスタン人 社会における自身の価値を高めたい欲求 自身の優秀性を示す手段のひとつ 自身の価値づけを目的とした言語学習
	多言語話者に対する社会的要求	カザフ語との言語的類似性から生じた興味 多言語学習に対する心理的障壁の少なさ 多言語話者であることが理想
	民族性を(再)認識させる「母語」	「母語」であるという意識とともに継承 民族アイデンティティの保持と継承 自身の民族的認識を再確認する言語
不選択	政策的背景から失われた民族意識	民族のことばを学ぶ余裕のなさ 民族意識を持つ機会を持たない 民族のことばに目を向ける機会のなさ

【表2】タタール語選択・不選択の動機とその要因（カザフスタン・ヌル＝スルタン）

カザフスタン（表 2 参照）では、13 の概念が生成され、これらは 4 つのカテゴリーにまとめられた。2007 年に「3 言語一体」政策が打ち出されたが、とくに 30 代以下の若い世代のあいだではカザフ語、ロシア語、英語の 3 言語を習得した人物が「理想的なカザフスタン人」のイメージとして広く共有され、少なくともこれら 3 言語を習得することは当然のことと考えられ始めている。このような社会的な情勢を背景に、さらに多くの言語を習得することで自身の優秀性を示したいとするタタールは多く、タタール語は【自身の社会的価値づけ】を高めることを動機として選択されている。このように、政策的にも多言語話者であることが理想として示されるカザフスタンでは、言語学習に対する心理的な障壁が少なく、若い世代を中心に複数の言語を習得する者も珍しくない。とりわけ 20 代以下の過半数はカザフ語を

高いレベルで習得しており、カザフ語との言語的な類似性からタタール語やトルコ語などテュルク諸語への関心を高める傾向がみられた。つまり、自身の社会的価値づけを高めるという動機の背景には、【多言語話者に対する社会的要求】も強いと考えられる。なお、カザフスタンのタタールは世代を問わずタタール語を母語と認識する傾向が強く、家庭内においてもタタール語が選択される機会が多い。近年では 3 言語の知識を持つことが「カザフスタン人」のスタンダードとなりつつあるが、これに加えてタタール語の知識も持つことが「カザフスタンのタタール」という自己認識に繋がっている。つまり、タタール語は【民族性を(再)認識させる「母語」】としての役割を担っており、タタール語を選択することは自身の「タタールらしさ」を強く意識させる背景要因となっている。

このように、近年のカザフスタンでは 3 言語の習得が前提とされ、カザフスタン人というナショナル・アイデンティティの普及も進みつつある。他方で、その影響で民族意識を持つ機会がなかったり、それ以外の言語を学ぶ余裕がないと感じる者のあいだではタタール語は選択されにくい。つまり、【政策的背景から失われた民族意識】を背景要因にタタール語が選択されない事例が少数ではあるが見られた。

	【カテゴリー】	〈概念〉
タタール語を不選択	社会的情勢によるタタール語学習機会の少なさ	タタール語学校が設置されなかった ソ連時代の教育観からなる民族語を学ぶ機会の喪失 知識と経験をもったタタール語講師の不足
	内戦による人口均衡の大幅な変化	親族の離散 タタール語話者コミュニティの分断 生存戦略としてタジク語の習得が優先された
	タタール語を選択する機会と理由の欠如	言語習慣を変える必要のなさ タタール語で交流する機会のなさ タタール語を学習する機会のなさ
選択	タタールスタン共和国への移住と現地社会への適応	タタールスタン共和国の大学に入学するため タタールスタン共和国のタタール社会に馴染むため

【表3】タタール語不選択・選択の動機とその要因（タジキスタン・ドゥシャンベ）

タジキスタン（図 3 参照）では、11 の概念が生成され、これらは 4 つのカテゴリーにまとめられた。タジキスタンにおいては、1992 年から 1997 年まで内戦を経験しており、経済的な疲弊が長年続いてきた。多くの収入や機会を求めるタタールのなかには、タタールスタン共和国への進学や就職を目指す事例もみられ、かれらのあいだでタタール語は【タタールスタン共和国への移住と現地社会への適応】を動機に、学習言語として選択されている。

内戦は現在にいたるまで多くの影響を残している。ソ連時代に生まれ育った 30 代以上の大多数は親族との交流でタタール語を聞き話した記憶を持っていたが、内戦で親戚のタタールが国外に移住したことにより、国内のタタール語話者コミュニティの分断が進んでいった

と考えられる。つまり、【内戦による人口均衡の大幅な変化】を背景要因にタタール語の優先度は下がり、選択されなくなっていった。非タジクの国外流出が深刻だったことから、内戦後のタジキスタンでは基幹民族であるタジクの人口比率がいっそう高まった。ゆえに、タジキスタンに残ったタタールのあいだでは生存戦略としてタジク語の習得が優先され、ゆえに大多数はタジク語とロシア語の２言語話者である。現在はこの２言語を知っていれば、少なくとも言語に起因する社会的困難は起こりにくく、親族間交流の場においてもこれらの言語が選択されることが多い。つまり、【タタール語を選択する機会と理由の欠如】を要因に、やはりタタール語は選択されにくい状況となっている。また、タタール文化センターは内戦の影響で長らく閉鎖を余儀なくされ、その後も知識と経験を持ったタタール語教師が不足するなど、タタール語を学習する機会が非常に限られている。【社会的情勢による民族語学習機会の少なさ】もまた、タタール語が選択されない要因のひとつである。

３つの調査地に共通するタタール語の選択／不選択の要因と動機を総括すると、まず**①「使用機会の有無」**がタタール語を選択するうえで、重要な要因となっている。事例では、家庭内および親族間交流の際にタタール語を使用する機会がある場合はタタール語が選択されやすく、そうでない場合には選択されにくいことが示された。これは家庭内や親族間交流に限られず、たとえば民族文化センターや民族アンサンブル、民族語学校といったタタール語空間の有無にも言えることである。つまり、タタール語が使用される空間に身を置く機会の有無はタタール語の選択／不選択にも大きく関わっており、これは学習機会の有無と言い換えることもできる。また、**②「現在話す言語との言語的類似性の有無」**もタタール語を新たに学習するうえでひとつの要因となりうる。ウズベキスタンとタジキスタンではウズベク語の、カザフスタンではカザフ語の知識を持つ調査協力者のあいだでは、学びやすさや理解の容易さを理由にタタール語に関心を持ち、学習に着手する事例が見られた。一方で、タタール語空間に身を置く機会に乏しく、ロシア語やタジク語などテュルク諸語ではない言語の知識のみを持つ場合はタタール語に関心が向きにくく、母語意識も抱きにくい。加えて、**③「タタール語によって得られるメリットの有無」**もまた、タタール語の学習に着手し、継続するうえで重要な要因となっている。タタールスタン共和国への就職や進学の際に有利になることもあり、これらを検討する際にタタール語が選択されやすい。なお、ここでの「メリット」は必ずしも就職や進学といったキャリア形成の場面に限定されず、自身の民族性を意識したり、表示する必要がある場合も含まれる。とくに「タタールらしさ」や「タタールであること」を強く表示する際にタタール語が象徴的な意味合いを持つことも多いことから、**④「タタール意識の有無」**もタタール語を選択するうえで重要な要因となり得る。

7.4. 結論から何が言えるか

本研究は、中央アジア３カ国に居住するタタールの言語選択の状況について、言語政策に注目しながら、個別事例の観点から論じるものであった。その結果として、対象とした３カ国の言語政策やタタールの言語選択の状況とその背景要因は、それぞれ大きく異なることが明確に示された。この地域を事例とする社会言語学分野の研究は、伝統的に地域全体を研究

対象とする概括的なものが多くを占めてきたが、本研究が示す結論は、概括的な視点だけでなく、個別的な視点からも論じることの重要性を示すものである。今後さらに議論の裾野をタタール・ディアスポラ全体へと広げるときにも、この視点は生きてくるだろう。

また、従来型の概括的な研究のなかでは、タタールを含む多くの民族のことばがソ連期にその活力を低下させたとされ、同様に中央アジア諸国のタタールも多くがソ連期にタタール語の知識や運用能力を損なったと考えられてきた。フルシチョフ期に教育言語の自由選択化が進んだことでロシア語教育が拡大し、やがてマイノリティの民族語の知識や能力は軽んじられるようになっていったことがその背景にある。一方で、ウズベキスタンおよびカザフスタンにおける調査では、その運用能力や知識に個人差はあるが、ソ連期に生まれ育った調査協力者の半数程度は家庭内でタタール語を使用していることを示した。そして、タジキスタンでは、内戦で多くのタタールが国外に移り住んだものの、現在もタジキスタンに暮らすタタールからはソ連期に親族とタタール語で交流した記憶が多く語られた。これらの調査結果は、ソ連期にタタール語で教育を受けたタタールは大幅に減少したものの、タタール語は家族あるいは親族間交流の言語として選択され続けてきた可能性を示すものである。つまり、公的空間ではロシア語教育やその使用が推進されたが、私的空間ではタタール語が継承されてきた、あるいはソ連期に継承されていた可能性を示唆する。私的空間において、民族語や母語、継承語と位置づけられる言語が継承されることそれ自体は必ずしも珍しい現象ではない。他方で、中央アジアにおけるマイノリティの言語という視点に立てば、民族語をめぐる具体的な状況が長らく見えてこなかったという問題が指摘できる。ゆえに、少なくともウズベキスタンとカザフスタンのタタールは私的空間においてタタール語を使用し、継承し、一部では学習が著しく促進される動きも見られるという実態を示したことは、中央アジアという地域の現在を新たな視点から捉え、より深く知るうえでも意味のある成果となろう。

さらに、本研究は、言語を選択するにあたって、使用機会の有無が非常に重要な要素であることも示した。タタール文化センターにおけるタタール語講座がタタール語学習という選択肢そのものを創出したように、まず話者コミュニティを整備することは、使用機会を生み出すにあたって大きな効果をもつ。話者コミュニティがあることで使用機会は生み出され、使用機会が増えることで、話者数とともにその言語の需要も増えていく。つまり、タタールスタン共和国のディアスポラ支援策は、タタール語の使用機会を生み出し、話者コミュニティを整備するという点で有効であると結論づけられる。

ここまでの議論で得られた結論から導き出されるのは、ある言語をめぐる状況は言語政策を含む外的な要因によってたやすく左右されるということである。たとえば、ソ連期には教育言語の自由選択化が進められたことでロシア語教育が拡大し、やがて民族語の活力は低下していった。本研究で注目したタタール語はその頃に第一言語とする人口を減らしたと考えられる。タジキスタンでは内戦により国内のタタール語話者コミュニティが分断された結果、若い世代のタタール語話者は育たなかった。特に民族語に言及された際には、「消滅する」、「危機言語となる」というように、まるで言語がひとりでに消えていくかのような語られかたをすることは多いが、言語はひとりでに活力が損なわれるわけでも、消滅するわけでもな

い。何らかの要因があってそうなってしまうのだと言えよう。他方で、ウズベキスタンとカザフスタンでは言語政策の影響により、結果的にタタール語に注目するタタールは増えつつある。そして、タタールスタン共和国による支援を受けた各地のタタール文化センターなどが彼らの受け皿となり、タタール語の学習機会の創出に重要な役割を果たしてきた。このように、言語は外的な要因によって活力が損なわれることもあるが、却って活力が高められることもある。ゆえに、言語政策によってだれがどのような影響を受けるのか、その背景要因を見極めることは、言語の保護や学習の促進という観点からも極めて重要である。

資料 1. 博士論文の引用文献および参考文献

- 淺村卓生（2007）「1924-1934年における「ウズベク語」理念の模索：標準語の母音調和法則の扱いをめぐって」『東欧研究』第36号、48-60頁。
- 淺村卓生（2011）「カザフスタンにおける自国語振興政策及び文字改革の理念的側面」『外務省調査月報』第1号、1-24頁。
- 淺村卓生（2015）『国家建設と文字の選択：ウズベキスタンの言語政策』ブックレット《アジアを学ぼう》36、風響社。
- 荒井幸康（2006）『「言語」の統合と分離：1920-1940年代のモンゴル・ブリヤート・カルムイクの言語政策の相関関係を中心に』三元社。
- アンダーソン、ベネディクト[原著](2007)『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』（白石隆・白石さや　訳）書店工房早川。
- 伊賀上菜穂（2008）「ポスト社会主義民族誌の可能性 ： エスニシティとナショナリズムにおける民族の想像 ： ロシア連邦におけるロシア人サブグループをめぐる昨今の状況 ： 民族の境界と「権利」の諸相」高倉浩樹・佐々木史郎 編『ポスト社会主義人類学の射程』国立民族学博物館調査報告、225-226頁。
- 石黒格（2012）「スノーボール抽出」大澤真幸・吉見俊哉・鷲田清一 編『現代社会学辞典』725頁。
- 猪口孝 編（2009）『アジア・バロメーター 南アジアと中央アジアの価値観：アジア世論調査（2005）の分析と資料』明石書店。
- 臼山利信（2005）「旧ソ連地域における社会環境の変化とロシア語事情：ウズベキスタン共和国、キルギス共和国を中心として」『SLAVIANA』第20号、194-222頁。
- 臼山利信（2014）「民族国家語とロシア語：グローカル化する中央アジアの言語状況」堤正典[編]『ロシア語学と言語教育IV』、23-31頁。
- 宇山智彦（1997）「言語がもたらす中央アジア社会の統合と分裂」『アジ研ワールド・トレンド』第19号、20-21頁。
- エルタザロフ、ジュリボイ 原著（2010）『ソヴィエト後の中央アジアー文化、歴史、言語の諸問題』（藤家洋昭[監訳]、小松格・吉村太樹 訳）大阪大学出版会。
- 岡奈津子（1999）「民族語の復興とそのジレンマ：国家語の制定をめぐって」『アジ研ワールド・トレンド』第42号、19-20頁。
- 岡奈津子（2004）「民族と政治：国家の『民族化』と変化する民族間関係」岩崎一郎ほか 編著『現代中央アジア論』日本評論社、81-102頁。
- 小野原信善（2004）「アイデンティティ試論：フィリピン言語意識調査から」小野原信善・大原始子 編著『ことばとアイデンティティ：ことばの選択と使用を通してみる現代人の自分探し』三元社、15-51頁。
- 小田桐奈美（2015）『ポスト・ソヴィエト時代の「国家語」国家建設期のキルギス共和国における言語と社会』関西大学出版部。
- 帯谷知可（2003）「最近のウズベキスタンにおける国史編纂をめぐって：『民族独立理念』のもとでの『ウズベク民族の国家史』」『東欧・中央ユーラシアの近代とネイションI』(北海道大学スラブ研究センター研究報告シリーズ第89号)、35-48頁.
- 抱井尚子（2015）「理論からストーリーへ：構成主義的グラウンデッド・セオリー法とは」『青山国際政経論集』第94号、43-71頁。
- カルヴェ、ルイ＝ジャン 原著（2000）『言語政策とは何か』（西山教行 訳） 白水社。
- 河野明日香（2018）「教育と国家建設：独立語の教育にみる人材育成」宇山智彦・樋渡雅人 編著『現代中央アジア：政治・経済・社会』日本評論社、231-255頁。
- 河原俊昭（2004）「【理論・一般】89. 最近、よく「言語政策」という言葉を目にするようになりましたが、どのようなものなのでしょうか？」河原俊昭・山本忠行 編（2004）『多言語社会がやってきた：世界の言語政策Q&A』くろしお出版、182-183頁。
- 木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い』弘文堂。
- 木下康仁（2007）『ライブ講義M-GTA実践的質的研究法：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂。
- 木村護郎クリストフ（2011）「私たちはどのように言語を管理するのか」山下仁・渡辺学・高田博行[編]『言語意識と社会－ドイツの視点・日本の視点－』三元社、61-89頁。
- 木村護郎クリストフ（2015）「言語政策」斎藤純男・田口善久・西村義樹 編（2015）『明解言語学辞典』三省堂、66-67頁。
- ゲルナー、アーネスト 原著（2000）『言語とナショナリズム』（加藤節ほか 訳）岩波書店。
- コーエン、ロビン 原著（2001）『グローバル・ディアスポラ』（駒井洋監・角谷多佳子 訳）明石書店。

- 古賀正義（2008）「質的研究の四半世紀半：「質対量」論争を超えて、ポストモダンな時代へ」古賀正義 編著『質的調査法を学ぶ人のために』世界思想社。
- 小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹 編（2005）『中央ユーラシアを知る事典』平凡社。
- 小松久男（2005）「タタール商人」小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹 編（2005）『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、323-324頁。
- 佐藤郁哉（2002）『フィールドワークの技法：問いを育てる、仮説を鍛える』新曜社。
- 櫻間瑛・中村瑞希・菱山湧人 編著（2017）『タタールスタンファンブック』パブリブ。
- 櫻間瑛（2015）『現代ロシアにおける民族運動のなかの「民族文化」表象とその限界：クリャシェン（受洗タタール）の「民族的祭り」を事例に』「地域研究」第16号1巻、240-267頁。
- 櫻間瑛（2018）『現代ロシアにおける民族の再生：ポスト・ソ連社会としてのタタルスタン共和国における「クリャシェン」のエスニシティと宗教＝文化活動』三元社。
- 櫻間瑞希（2018）「アスタナのタタール人とその民族語復興をめぐって：言語選択の状況と背景を中心に」『中央アジアから見る「人の動き」に対応する人文研究」81-83頁。
- 櫻間瑞希（2019）「タタール・ディアスポラと母語継承：タシケント在住タタール人のタタール語状況」『協働会議「文化・民族・言語の多様性とその学際的研究」論文集』61-71頁。
- 塩川伸明（1999）「ソ連言語政策史再考」『スラヴ研究』第46号、155-190頁。
  ただし全文は北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターの公式HPで公開されており、本稿もこれを参照している。URL：http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/46/shiokawa/shiokawa.html
- 塩川伸明（2004）『民族と言語：多民族国家ソ連の興亡I』岩波書店。
- 塩川伸明（2007）『ロシアの連邦制と民族問題：多民族国家ソ連の興亡 II』岩波書店。
- 塩川伸明（2008）『民族とネイション－ナショナリズムという難問』岩波書店。
- 渋谷謙次郎（1995）「『国民国家』の位相と『言語の権利』」早稲田大学大学院『法研論集』第73号、102-110頁。
- 渋谷謙次郎（2007a）「『母語』と統計－旧ソ連・ロシアにおける『母語』調査の行方」『ことばと社会』第10号、三元社、175-207頁。
- 渋谷謙次郎（2007b）「言語権の理論的諸問題」渋谷謙次郎・小嶋勇[編]『言語権の理論と実践』三元社、13-101頁。
- 清水学（2002）「タジキスタン：独立・内戦と今後の課題」『同志社商学』第54巻、1-17頁。
- 菅原睦（2005）「タタール語」小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹 編（2005）『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、322-323頁。
- 高橋知也（2001）「言語の集中と衰退に関する理論分析」『アジア研究所紀要』第28号、1-12頁。
- 武田友加（2018）「中央アジアの雇用・貧困と社会保護制度：現状と課題」宇山智彦・樋渡雅人 編著『現代中央アジア：政治・経済・社会』日本評論社、129-156頁。
- 田尻英三・大津由紀雄 編（2010）『言語政策を問う！』ひつじ書房。
- タスタンベコワ、クアニシ（2007a）「カザフスタンにおける言語教育政策の課題：ロシア語優位社会におけるカザフ語中心主義の行方」『比較教育学研究』第35号、33-48頁。
- タスタンベコワ・クアニシ（2007b）「カザフスタンの言語政策：過去からの解放へ向かって」『ユーラシア研究』第37号、60-70頁。
- タスタンベコワ、クアニシ（2010）「カザフスタンの言語教育政策に関する一考察：在外帰還カザフ人（オラルマン）の言語問題に着眼して」『教育学論集』第6号、83-103頁。
- タスタンベコワ、クアニシ（2015）「カザフスタンの少数民族教育政策に関する一考察：教育スタンダードにおける言語教育の比重の分析を通して」『筑波教育学研究』第13号、39-59頁。
- ダダバエフ、ティムール（2008）『社会主義後のウズベキスタン：変わる国と揺れる人々の心』、アジア経済研究所。
- 田中克彦（1997）『言語、国家、そして権力』新生社。
- 田中克彦（1998）「国家と国家語」『思想』10月号、76-90頁。
- 田中克彦（2000）「公用語とは何か」『言語』8月号、40-46頁.
- 田中慎也・木村哲也・宮崎里司（2009）『移民時代の言語教育：言語政策のフロンティア1』ココ出版。
- 田辺俊介（2001）「日本のナショナル・アイデンティティの概念構造：1995 ISSP National Identityデータの実証的検討から」『社会学評論』第53号3巻、398-412頁。
- 独立行政法人国際協力機構（2015）『カザフスタン 経済特区への日本企業誘致戦略策定業務：ファイナルレポート』URL：https://openjicareport.jica.go.jp/pdf/1000021857.pdf
- 豊田国夫（1964）『民族と言語の問題：言語政策の課題とその考察』錦正社。
- 中谷猛（2000）「『ナショナル・アイデンティティ』の概念に関する問題整理」『立命館法學』第3号、

1301-1332頁。

- 中村瑞希（2016）「タタール・ディアスポラの言語使用状況－タシケントのタタール人の事例から」、『スラヴィアーナ』第8号、19-36頁。
- 中村喜和「タタールのくびき」小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹 編（2005）『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、324-325頁。
- ナハイロ、ボフダンおよびスヴォボダ、ヴィクトル 原著（1992）『ソ連邦民族・言語問題の全史』（田中克彦 監修、高尾千津子・土屋礼子 訳）明石書店。
- 西川長夫（2002）「民族という錯乱」『立命館比較文化研究』第14号第1巻、95-103頁。
- 西島祐（2017）「国家語の概念小史：19世紀半ばから20世紀前半のドイツ語圏、保科孝一、田中克彦までにおける」『言語政策』第13号、1-20頁。
- 西山克典（2005）「タタール人」小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹 編（2005）『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、322頁。
- 野田岳人（1996）「中央アジア独立共和国と言語問題」『外交時報』5月号、111-125頁。
- 林俊雄（2005）「ブルガル」小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹 編（2005）『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、459-460頁。
- 平高史也（1999）「日本語教育史研究の可能性」『日本語教育』第100号、45-56頁。
- 松長昭（2009）『在日タタール人：歴史に翻弄されたイスラーム教徒たち』(ユーラシアブックレット134）、東洋書店。
- 松原好次（2008）「言語的マイノリティのための言語政策：少数言語話者の言語権を求めて」『湘南国際女子短期大学紀要』第15号、129-141号。
- 水谷邦子（2001）「ウズベキスタン－高校レベルの教育改革を中心に－脱ロシアのための人材育成」『Science of Humanity Bensei』第36号、42-48頁。
- 嶺井明子（1987）「多民族国家ソ連における共通語教育」『教育制度研究』第20号、11-17頁。
- ムヒナ、ヴァルヴァラ（2017）「ソビエト連邦解体以降のロシアにおける民族政策と帰属意識について：「我々」と「他者」の境界線を巡って」『上智大学外国語学部紀要』第52号、41-65頁。
- 渡辺信（2003）「独立後のウズベキスタンにおける国民統合と民族政策」『ユーラシアの平和と紛争：秋野豊賞調査報告集』明石書店、103-145頁。
- 渡辺伸勝（2007）「二言語共同体における言語イデオロギー：あるブラジルの日系人共同体を事例として」『言語コミュニケーション文化』第5号1巻、49-62頁。
- BAKHRONOVA Munisa（2008）「民族的マイノリティの言語選択とアイデンティティ：旧ソ連中央アジア・ウズベキスタンの学校教育現場の事例から」『言語情報科学』第6号、265-282頁。

- Abaskanova, Zhyldyz (2016) "*Russian Minorities in the Post-Soviet Space: A Comparative Analysis of Kyrgyzstan and Uzbekistan*." Dissertation work submitted to Central European University, Department of International Relations.
- Abdullaev Kamoludin (2018) "Historical Dictionary of Tajikistan (3rd Edition)." Roman & Littlefield.
- Abdurakhimova, Dilnoza (2017) "*Uzbek Minorities' Experiences in Majority Higher Education Institutions*." Dissertation work submitted to the Nazarbayev University, Graduate School of Education.
- Ahn, Elise and Smagulova, Juldyz (2016) "*Language Change in Central Asia*." Walter de Gruyter.
- Akynova, Damira and Zhalkynbekova, Sholpan et. al. (2014) "Language Choice among the Youth of Kazakhstan: English as a Self-Representation of Prestige." *Procedia - Social and Behavioral Sciences*, 143. pp. 228-232.
- Aminov, K. et. al. (2010) "Language Use and Language Policy in Central Asia." *Central Asia Regional Data Review*, 2-1. pp. 1-29.
- Anderson, Barbara and Silver, Brian (1990) "Some Factors in the Linguistics and Ethnic Russification of Soviet Nationalities: Is Everyone Becoming Russian?" in Hajda Lubomyr et. al. eds. *The Nationality Factors in Soviet Politics and Society*. Westview. pp. 95-130.
- Bahry, Stephen et al. (2017) "Bilingual Education in Central Asia." *Bilingual and Multilingual Education - series: Encyclopedia of Language and Education*, pp. 259-280.
- Bohr, Annette (1995) "Language policy and Ethnic Problems of Uzbekistan and its Neighbours." in Graham Smith et. al. *Nation-building in the Post-Soviet Borderlands: The Politics of National Identities*, Cambridge University Press: pp. 197-223.
- Bozrikova, Tatyana (2004) "Problems of Ethnic Minorities in Tajikistan." Open Society Institute Assistance Foundation, Tajik Branch.
- Brown, Michael et.al. (2017) "Radio and the Development of Kazakh as a National Language." *Journal of Radio*

& Audio Media, 24. pp. 161-175.

- Brubaker, Rogers (1996) "*Nationalism Reframed: Nationhood and the National Question in the New Europe.*" Cambridge University Press.
- Brubaker, Rogers (2005) "The 'Diaspora' Diaspora." *Ethnic and Racial Studies*, 28-1. pp. 1-19.
- Castellino, Joshua (2012) "*Global Minority Rights*." Routledge Taylor & Francis Group.
- Cohen, Robin (1997) "*Global Diasporas: An Introduction.*" UCL Press.
- Comrie, Bernard (1981) "*The Languages of the Soviet Union*." Cambridge University Press.
- Dave, Bhavna (2007) "*Kazakhstan – Ethnicity, Language and Power*." Routledge.
- Davenel, Yves-Marie (2009) "Are National Minorities of the Former USSR Becoming New Diasporas? The Case of the Tatars of Kazakhstan." in Fernandez Jane eds. *Diasporas. Critical and Interdisciplinary Perspectives*. Oxford: Inner-Disciplinary Press: pp.75-85.
- Davenel, Yves-Marie and Yim, Eunsil (2016) "Minority Assimilation and Nation-Building in Kazakhstan." in Issacs, Rico and Polese, Abel eds. *Nation-Building and Identity in the Post-Soviet Space: New Tools and Approaches*, pp. 46-64.
- Dietrich, Ayse (2018) "Language Policy and Hegemony in the Turkic Republics." Language Planning in the Post-Communist Era, Andrews, Ernest eds. *Language Planning in the Post-Communist Era*, Springer, pp. 145-167.
- Dodykhudoeva, Leyli (2019) "Categorization of Minority Pamir Languages in Tajikistan." in Moskvitcheva, Svetlana and Viaut, Alain eds. *Minority Languages from Western Europe and Russia: Cooperative Approaches and Categorical Configurations*. Springer. pp. 81-98.
- Erikson, Erik Homburger (1959) "*Identity and Life Cycle*." Psychological issues (series), monograph-1, International University Press.
- Esman, Milton (2009) *"Diasporas in the Contemporary World."* Polity Press.
- Fierman, William (1991) "*Language Planning and National Development: The Uzbek Experience*." Mouton de Gruyter.
- Fierman, William (2016) "Trends of Language Use in Prestige Domains in Post-Soviet Central Asia." *Alatoo Academic Studies*, 1. pp. 35-42.
- Finke, Peter (2017) "Be(com)ing Uzbek: Patterns of Identification and Processes of Assimilation." in Marlene Laruelle eds. *Constructing the Uzbek States: Narratives of Post-Soviet Years (Contemporary Central Asia: Societies, politics, and cultures)*. pp. 239-260.
- Fishman, Joshua (1972) "*The Sociology of Language: An Interdisciplinary Social Science Approach to Language in Society*." Newbury House.
- Fishman, Joshua and Gerner, Michael et.al. (1985) "*The Rise and Fall of the Ethnic Revival: Perspectives on Language and Ethnicity*." Mouton Publishers.
- Fishman, Joshua (2004) "Ethnicity and Supra-Ethnicity in Corpus Planning: The Hidden Status Agenda in Corpus Planning." *Nations and Nationalism*, 10. pp.79-94.
- Fouse, Gary (2000) *"The Languages of the Former Soviet Republics: Their History and Development."* University Press of America.
- Gretsky, Sergei (1995) "Civil war in Tajikistan and its International Repercussions." *Critique: Critical Middle Eastern Studies*, 4. pp. 3-24.
- Goodman, Bridget and Lyulkun, Nina (2010) "Ukrainian, Russian, English: Language Use and Attitudes of Students at a Ukrainian University." *Educational Linguistic*, 25-1. pp.77-93.
- Hornberger, Nancy (2006) "Frameworks and Models in Language Policy and Planning." in Ricento, Thomas eds. *An Introduction to Language Policy: Theory and method*. Blackwell Publishing, pp.26-41.
- Isaacs, Rico and Polese, Abel (2015) "Between "Imagined" and "Real" Nation-building: Identities and Nationhood in Post-Soviet Central Asia." *Nationalities Papers: the Journal of Nationalism and Ethnicity*, 43. pp. 371-382.
- Isaeva, Kamila et. al. (2017) "The Kaleidoscope of Language, Ethnicity, and Identity in Uzbekistan." *Changing Values and Identities in the Post-Communist World*. pp. 295-311.
- Kaplan, Robert and Baldauf, Richard (1997) *"Language Planning: From Practice to Theory."* Clevedon: Multilingual Matters.
- Karabaev, Daniyar and Ahn, Elise S. (2016) "Language-in-Education: A look at Kyrgyz Language Schools in the Badakhstan Province of tajikistan." in Elise S. Ahn and Juldyz Smagulova eds. *Language Change in Central Asia*. De gruyter mouton, pp. 149-168.
- Khan, Valeriy (2005) "On the Problem of Revival and Survival of Ethnic Minorities in Post-Soviet Central Asia." in Birgit Schlyter eds. *Prospects for Democracy in Central Asia*, Swedish Research Institute, pp. 69-80.

- Khan, Valeriy (2018) "Nation-building in Central Asia: Towards a New Ethnic Policy." in Catherine Owen, Shairbek Juraev et.al. eds. *Interrogating Illiberal Peace in Eurasia: Critical Perspectives on Peace and Conflict (Global dialogues: developing non-eujocentric IR and IPE)*. pp. 145-170.
- Klaas, Maarja (2015) "The Role of Language in (Re)creating Tatar Diaspora Identity: The Case of the Estonian Tatars." *Journal of Ethnology and Folkloristics*, 9. pp. 3-19.
- Landau, Jacob (2010) "Alphabet Reform in the Six Independent Ex-Soviet Muslim Republics." *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain & Ireland (Third Series)*, 20-1. pp.25-32.
- Landau, Jacob and Kellner-Heinkele, Barbara (2012) "*Language Politics in Contemporary Central Asia: National and Ethnic Identity and the Soviet Legacy*." I.B.Tauris.
- Laruelle, Marlene (2015) "In Search of Kazakhness: The Televisual Landscape of Screening of Nation in Kazakhstan." *Demokratizatsiya: The Journal of Post-Soviet Democratization*, 3. pp.321-340.
- Malashko, Alexey (2013) "*The Fight for Influence: Russian in Central Asia*." Carnegie Endowment for Int'l Peace.
- Martin, Terry (2001) "The Affirmative Action Empire: Nations and Nationalism in the Soviet Union: 1923-1939", Cornell University Press.
- May, Stephen (2006) "Language Policy and Minority Rights." in Ricento, Thomas eds. *An Introduction to Language Policy: Theory and Method*. pp. 255-272.
- Moghadam, Soodeh Hamzehlou and Samad, Adlina Abdul (2012) "Code Switching as a Medium of Instruction in an EFL Classroom," Theory and Practice in Language Studies, 2-11. pp. 2219-2225.
- Nabiullina, G.A. and Yusupova, A.S. (2015) "On the Linguistic Situation of the Tatar Diaspora in the USA." *Mediterranean Journal of Social Sciences*, 6-5. pp.298-302.
- Nagzibekova, Mahrinisso (2008) "Language and Education Policies in Tajikistan." International Journal of Bilingual Education and Bilingualism, 11: 3-4. pp. 501-508.
- Nakamura, Mizuki Alexandra (2015) "Language Situation and Attitude towards the Tatar Language: The Case of Tatars in Tashkent, Uzbekistan." *Культурные, экономические, технологические контакты и взаимодействие Японии и Татарского мира: история и современность (Материалы международной научной конференции, посвященной 80-летип мечети в г. Кобе)*, Институт истории им. Ш.Марджании Академии наук РТ, pp.53-60.
- Pavlenko, Aneta (2008a) "Russian in Post-Soviet Countries." *Russian Linguistics*, 32-1. pp.59-80.
- Pavlenko, Aneta (2008b) "Multilingualism in Post-Soviet Countries: Language Revival, Language Removal, and Sociolinguistic Theory." *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 11:3-4. pp. 275-314.
- Pavlenko, Aneta (2011) "Language Rights versus Speakers' Rights: On the Applicability of Western Language Rights Approaches in Eastern European Contexts." *Language Policy*, 10. pp. 37-58.
- Pavlenko, Aneta (2013) "Multilingualism in Post-Soviet Successor States." *Language and Linguistics Compass*, 7-4. pp.262-271.
- Skutnabb-Kangass, Tove and Phillipson, Robert (1989) "'Mother Tongue': the Theoretical and Sociopolitical Construction of a Concept." Ulrich, Ammon eds. *Status and Function of Languages and Language Varieties*, Walter de Gruyter.
- Skutnabb-Kangass, Tove and Phillipson, Robert (1995) "*Linguistic Human Rights: Overcoming Linguistic Discrimination*." Mouton de Gruyter.
- Schlyter, Birgit (1998) New Language Laws in Uzbekistan." *Language Problems and Language Planning*, 22-2. pp.143-81.
- Schlyter, Birgit (2001) "Language Policies in Present-Day Central Asia." *International Journal on Multicultural Societies*, 3-2. pp.127-136.
- Schlyter, Birgit (2003) "Sociolinguistic Changes in Transformed Central Asian Societies." in Maurais, Jacques and Morris Michael eds. *Languages in a Globalising World*. Cambridge University Press, pp. 157-187.
- Schlyter, Birgit (2005) "The Karakalpaks and Other Language Minorities under Central Asian State Rule." in Schlyter Brigit eds. *Prospects for Democracy in Central Asia*, vol.15. Swedish Research Institute, pp.81-94.
- Schlyter, Birgit (2007) "Language Reform and Language Status in Multilingual Uzbekistan." *Asian Cultures and Modernity Research Reports*, 13. pp. 81-94.
- Schlyter, Birgit (2012) "Multilingualism and Language Renewal in Ex-Soviet Central Asia." in Bhatia Tej and Ritchie William eds. *The Handbook of Bilingualism and Multilingualism,* Wiley and Blackwell, pp.871-898.
- Shaiakhmetova, Liliia et. al. (2017) "Tatar Virtual Institute of Kayum Nasyri", Journal of History Culture and Art Research, 6-6. pp. 628-633.
- Silver, Brian (1976) "Bilingualism and Maintenance of the Mother Tongue in Soviet Central Asia." *Slavic Review*, 35-3. pp. 406-424

- Sovik, Margrethe (2007) "*Support, Resistance & Pragmatism: An Examination of Motivation in Language Policy in Kharkiv, Ukraine*." Stockholm, Stockholm University.
- Zharkynbekova, Sholpan et. al. (2015) "Cultural and language self-identification of ethnic minority groups in Kazakhstan." *Sociolinguistic Studies*, 9: 2-3. pp. 289-314. 2015.

- *Абдулаев, Е. В.* «Русский язык: жизнь после смерти. Язык, политика и общество в современном Узбекистане» // Неприкосновенный запас, №4. 2009.
  E.V.アブドゥラエフ：ロシア語の死後：現代ウズベキスタンにおける言語・政治・社会
  Abdulaev, E. V. «Russkiĭ i͡azyk: zhizn′ posle smerti. I͡Azyk, politika i obshchestvo v sovremennom Uzbekistane»
  URL：http://www.intelros.ru/readroom/nz/nz-66/4102-russkijj-jazyk-zhizn-posle-smerti..html
- *Алишариева, А. Н.* «Лингвистическое самосознание многоязычных студентов Казахстана» // Казанский педагогический журнал, №3-116. 2016. стр. 83-87.
  A.N.アリシャリエワ：カザフスタンの多言語話者の学生の言語的な自己認識
  Alisharieva, A. N. «Lingvisticheskoe samosoznanie mnogoi͡azychnykh studentov Kazakhstana»
- *Алпанов, В. М.* «Языковая ситуация в регионах современной России» // Отечественные записки, №2. 2005.
  V.M.アルパノフ：現代ロシアの諸地域における言語状況
  https://strana-oz.ru/2005/2/yazykovaya-situaciya-v-regionah-sovremennoy-rossii
  Alpanov, V. M. «I͡Azykovai͡a situat͡siia͡ v regionakh sovremennoĭ Rossii»
- *Амирханов, Р. У.* «Некоторые особенности развития народного образования у татар в дооктябрьский период» // Народное просвещение у татар в дооктябрьский период. 1992. стр. 22-60.
  R.U.アミルハノフ：10月革命期以前におけるタタールの民族教育の発展といくつかの特殊性
  Amirkhanov, R. U. «Nekotorye osobennosti razvitii͡a narodnogo obrazovanii͡a u tatar v dookti͡abr′skiĭ period»
- *Арефьев, А. Л.* «Русский язык на рубеже XX-XXI веков» // Центр социального прогнозирования и маркетинга. 2012.
  A.L.アレフィエフ：20-21世紀の境界におけるロシア語
  Aref′ev, A. L. «Russkiĭ i͡azyk na rubezhe XX-XXI vekov»
- *Арутюнова, М. А.* «Языковая политика и статус русского языка в СССР и государствах постсоветского пространства» // Вестник Московского университета. Серия 25: Международные отношения и мировая политика, №1. 2012. стр. 155-178.
  M.A.アルテュノワ：ソヴィエト連邦およびポスト・ソヴィエト諸国家における言語政策とロシア語の地位
  Arutiu͡nova, M. A. «I͡Azykovai͡a politika i status russkogo i͡azyka v SSSR i gosudarstvakh postsovetskogo prostranstva»
- *Асанов, Ю. М.* «Исторические предпосылки развития партнерских связей в сфере образования России и Таджикистана (1867-1917) » // Вестник ТГПУ, № 5-182. 2017. стр. 16-21.
  Yu.M. アサノフ：ロシアとタジキスタンの教育分野におけるパートナシップ発展のための歴史的前提（1867-1917）
  Asanov, I͡U.M. «Istoricheskie predposylki razvitii͡a partnerskikh svi͡azeĭ v sfere obrazovanii͡a Rossii i Tadzhikistana(1867-1917)»
- *Бактыбаева, А. Т.　и Каимова, Д. Б.* «Роль казахского и русского языков в развитии современной языковой ситуации в Республике Казахстан» // Актуальные проблемы гуманитарных и естественных наук, №2. 2016. стр. 105-108.
  A.T. バクティバエワ・D.B. カイモワ：カザフスタン共和国の今日の言語状況の発展におけるカザフ語とロシア語の役割
  Baktybaeva, A. T.　i Kaimova, D. B. «Rol′ kazakhskogo i russkogo i͡azykov v razvitii sovremennoĭ i͡azykovoĭ situat͡sii v Respublike Kazakhstan»
- *Батыршин, Р. Р. и Валиуллин, И. Р.* «История татар Южно-Казахстанской области (по материалам энциклопедического издания «Татары Казахстана»)» // Научный альманах, 2016. стр. 472-475.
  R. R. バティルシン・I. R. ヴァリウッリン：南カザフスタン州のタタールの歴史－事典「カザフスタンのタタール」の資料に基づいて
  Batyrshin, R. R. i Valiullin, I. R. «Istorii͡a tatar I͡Uzhno-Kazakhstanskoĭ oblasti (po materialam ėnt͡siklopedicheskogo izdanii͡a «Tatary Kazakhstana»)»
- *Белоусов, В. Н. и Григорян, Э. А.* «Русский язык в межнациональном общении в Российской Федерации и странах СНГ (По данным социолингвистических опросов 1990-1995 гг.)» // Российская академия наук институт русского языка им. В.В.Виноградова. 1996.
  V.N.ベロウソフ・E.A.グリゴリヤン：ロシア連邦とCIS諸国の異民族間コミュニケーションにおけるロシア語
  Belousof, V. N. i Grigori͡an, Ė. A. «Russkiĭ i͡azyk v mezhnat͡sional′nom obshchenii v Rossiĭskoĭ Federat͡sii i stranakh SNG (Po dannym sot͡siolingvisticheskikh oprosov 1990-1995 gg.)»
- *Боришполец, К. П.* «Русский язык в центрально-азиатском регионе» // Вестник МГИМО Университета, №2-35. 2014. стр. 63-70.

K. P. ボリシュポレツ：中央アジア地域におけるロシア語
Borishpolet͡s, K. P. «Russkiĭ i͡azyk v t͡sentral′no-aziatskom regione»

- *Вишневский, А. Г.* «Распад СССР: этнические миграции и проблема диаспор» // Общественные науки и современность, №3. 2000, стр. 115-130.
A. G. ヴィシュネフスキー：ソ連崩壊：民族の移動とディアスポラの問題
Vishnevskiĭ, A. G. «Raspad SSSR: ėtnicheskie migrat͡siĭ i problema diaspor»

- *Габдурахманова, Г. Ф. и Сагдиева, Э. А.* «Татары современного Ташкента: этническая идентичность в контексте социальных трансформаций» // Этнографическое обозрение, №1, 2019. стр. 79-96.
G. F. ガブドゥラフマノワ・E. A. サグディエワ：現代タシュケントのタタール：社会変容の文脈における民族アイデンティティ
Gabdurakhmanova, G. F. i Sagdieva, Ė. A. «Tatary sovremennogo Tashkenta: ėtnicheskai͡a identichnost′ v kontekste sot͡sial′nykh transformat͡siĭ»

- *Газизова, Е. и Файзулаева, М.П.* «Татарская диаспора в Латвии» // Вестник Казанского государственного университета культуры и искусств, №2. 2010.
E. ガジゾワ・M. P. ファイズラエワ：ラトヴィアにおけるタタール・ディアスポラ
Gazizova, E. i Faĭzulaeva, M.P. «Tatarskai͡a diaspora v Latvii»

- *Гатауллина, Л. Р. и Ашрапова, А. Х.* «Концепт «Туган тел» в татарской лингвокультурологии (по результатам ассоциативного эксперимента)» В мире научных открытий. 2015. стр. 190-196.
L. R. ガタウッリナ・A. Kh. アシュラポワ：タタールの言語・文化学における「トゥガン・テル」の概念－連想実験の結果に基づいて
Gataullina, L. R. i Ashrapova, A. X. «Kont͡sept «Tugan tel» v tatarskoĭ ligvokul′turologii (po rezul′tatam assot͡siativnogo ėksperimenta)»

- *Губогло, М. Н.* «Языки этнической мобилизации» // Язык русской культуры. 1998.
M. N. グボグロ：民族動員の諸言語
Guboglo, M. N. «I͡Azyki ėtnicheskoĭ mobilizat͡sii»

- *Дятленко, П. И.* «Языковые реформы в Центральной Азии: тренды цели итоги» // Вестник Евразии, №4. 2008. стр. 80-109.
P. I. ジャトレンコ：中央アジアにおける言語改革－動向、目的、成果
Di͡atlenko, P. I. «I͡Azykovye reformy v T͡Sentral′noĭ Azii: trendy t͡seli itogi»

- *Еникеева, А. Р.* «История возникновения и особенности территориального расположения татарских этнокультурный центров» // Вестник Челябинского государственного университета № 21-236 «Политические науки. Востоковедение», вып. 11. 2011. стр. 102-105.
A. R. エニケエワ：タタール民族文化センターの形成の歴史とその領域的配置の特徴
Enikeeva, A. R. «Istorii͡a vozniknovenii͡a i osobennosti territorial′nogo raspolozhenii͡a tatarskikh ėtnokul′turnyĭ t͡sentrov»

- *Жетпеисова, Н. О.* «Становление и развитие школ национальных меньшинств в Казахстане» // Диссертация на соискание ученой степени кандидата педагогических наук, 1997.
N. O. ジェトペイソワ：カザフスタンにおける少数民族学校の確立と発展
ZHetpeisova, N. O. «Stanovlenie i razvitie shkol nat͡sional′nykh men′shinstv v Kazakhstane»

- *Иноятова,Д. М.* «Становление и развитие этнополитики в современном Узбекистане» // Вестник Омского университета, серия «Исторические науки», №1. 2014. стр. 49-57.
D. M. イノヤトワ：現代ウズベキスタンにおける民族政策の確立と発展
Inoi͡atova, D. M. «Stanovlenie i razvitie ėtnopolitiki v sovremennom Uzbekistane»

- *Ильхамов, А. А.* «Этнический атлас Узбекистана» // Институт Открытое Общество, 2002.
A. A. イルハモフ：ウズベキスタンの民族アトラス
Il′khamov, A. A. «Ėtnicheskiĭ atlas Uzbekistana»

- *Исхаков,Д. М.* «Татары (этническая история татарского народа)» // Татарское книжное издательство. 2005. стр.78.
D. M. イスハコフ：タタール（タタール民族の民族史）
Iskhakov, D. M. «Tatary (ėtnicheskai͡a istorii͡a tatarskogo naroda)»

- *Козлов, В. И.* «Проблема этнического самосознания и ее место теории этноса» // Козлов, В. И. Советская этнография. 1974. стр. 79-92.
V. N. コズロフ：民族的自己認識の問題とエトノスの理論におけるその位置づけ
Kozlov, V. I. «Problema ėtnicheskogo samosoznanii͡a i ee mesto teorii ėtnosa»

- *Коржов, И. Ю.* «Приграничная миграция на постсоветском пространстве (на примере Костанайской области Республики Казахстан и Челябинской области Российской Федерации) » // Российская Академия Естествознания Научный журнал «Успехи современного естествознания», №11. 2008.　стр. 109-111.
I. Yu. コルジョフ：ポスト・ソヴィエト空間における国境移民－カザフスタン共和国コスタナイ州とロシア連邦チェリャビンスク州を事例に
Korzhov, I. I͡U. «Prigranichnai͡a migrat͡sii͡a na postsovetskom prostranstve (na primere Kostanaĭskoĭ oblasti Respubliki Kazakhstan i CHeli͡abinskoĭ oblasti Rossiĭskoĭ Federat͡sii) »

- *Кондратьева, В.В.* «История возрождения традиционной культуры татарских диаспор Бурятии» // Вестник БГУ, №7. 2013. стр. 178-181.

V. V. コンドラチエワ：ブリヤーチヤのタタール・ディアスポラの伝統文化復興の歴史
Kondrat′eva, V.V. «Istoriia͡ vozrozhdeniia͡ traditsionnoĭ kul′tury tatarskikh diaspor Buria͡tii»

- *Курбина, Т. А.* «Развитие полилингвизма в Республике Казахстан» // Приоритетные направления развития науки и образования, №2. 2016, стр. 181-184.
  T. A. クルビナ：カザフスタン共和国における多言語主義の発展
  Kurbina, T. A. «Razvitie polilingvizma v Respublike Kazakhstan»
- *Курцев, Т. И.* «Этническая идентичность в эпоху глобализации» // Вестник КазГУКИ, № 4-2. 2014. стр. 1-3.
  T. I. クルツェフ：グローバリゼーション時代の民族アイデンティティ
  Kurtsev, T. I. «Ėtnicheskaia͡ identichnost′ v ėpokhu globalizatsii»
- *Кузембайулы, А. и Амнажилулы, Е.* «История Республики Казахстан», 1999.
  A.グゼンバイウル・E.アムナジウル：カザフスタン共和国の歴史
  Kuzembaĭuly, A. i Amnazhiluly, E. «Istoriia͡ Respubliki Kazakhstan»
- *Летняков, Д. Э.* «Роль русского языка в постсоветской Центральной Азии» // Журнал политической философии и социологии политики «Полития, Анализ, Хроника, Прогноз», №4-79. 2015. стр. 100-114.
  D. E. レトニャコフ：ポスト・ソヴィエト中央アジアにおけるロシア語の役割
  Letnia͡kov, D. Ė. «Rol′ russkogo ia͡zyka v postsovetskoĭ Tsentral′noĭ Azii»
- *Летняков, Д. Э.* «Языковая политика и языковая идентичность на постсоветском пространстве: случай русского языка» // Редакционная коллегия, №68. 2016. стр. 68-76.
  D. E. レトニャコフ：ポスト・ソヴィエト空間における言語政策と言語アイデンティティーロシア語を事例に
  Letnia͡kov, D. Ė. «IAzykovaia͡ politika i ia͡zykovaia͡ identichnost′ na postsovetskom prostranstve: sluchaĭ russkogo ia͡zyka»
- *Махмутов, З. А.* «Этнические процессы в среде современного татарского населения северо-казахстанской области Республики Казахстан» // Диссертация на соискание ученой степени кандидата исторических наук, 2009. Казанский государственный университет. № 04201050006.
  Z. A. マフムトフ：カザフスタン共和国北カザフスタン州の現代タタール住民の環境における民族プロセス
  Makhmutov, Z. A. «Ėtnicheskie protsessy v srede sovremennogo tatarskogo naseleniia͡ severo-kazakhstanskoĭ oblasti Respubliki Kazakhstan»
- *Махмутов, З. А.* «Этнокультурные процессы в среде татарской диаспоры Казахстана» // Вестник Чувашского университета, №4. 2012.
  Z. A. マフムトフ：カザフスタンのタタール・ディアスポラの環境における民族文化プロセス
  Makhmutov, Z. A. «Ėtnokul′turnye protsessy v srede tatarskoĭ diaspory Kazakhstana»
- *Махмутов, З. А. и Габдрахманова, Г. Ф.* «Особенности этнической идентичности виртуальных татарских сообществ в социальной сети вконтакте» // Историческая этнология, №1-2. 2016, стр. 276-292.
  Z. A. マフムトフ・G. F. ガブドゥラフマノワ：ソーシャルネットワーキングサービスVKontakteにおける仮想タタール・コミュニティの民族的アイデンティティの特徴
  Makhmutov, Z. A. i Gabdrakhmanova, G. F. «Osobennosti ėtnicheskoĭ identichnosti virtual′nykh tatarskikh soobshchestv v sotsial′noĭ seti vkontakte»
- *Машакова, А. К.* «Татары в Казахстане: этнокультурный центры и литературный процесс» // Научные труды КубГТУ, №4, 2019. стр. 585-591.
  A. K. マシャコワ：カザフスタンのタタール：民族文化センターと文学のプロセス
  Mashakova, A. K. «Tatary v Kazakhstane: ėtnokul′turnyĭ tsentry i literaturnyĭ protsess»
- *Мещеряков, К. Е.* «Русский вопрос в Узбекистане и российско-узбекские отношения» // Гуманитарные, социально-экономические и общественные науки, №7. 2014.
  K. E. メシェリャコフ：ウズベキスタンにおけるロシア問題とロシア・ウズベク関係
  Meshcheria͡kov, K. E. «Russkiĭ vopros v Uzbekistane i rossiĭsko-uzbekskie otnosheniia͡»
- *Молодов, О. Б.* «Трансформация языкового пространства стран Центральной Азии и Закавказья» // Theoretical & Applied Science, №9. 2015. стр. 58-62.
  O. B. モロドフ：中央アジア諸国およびザカフカス諸国における言語空間の変容
  Molodov, O. B. «Transformatsiia͡ ia͡zykovogo prostranstva stran Tsentral′noĭ Azii i Zakavkaz′ia͡»
- *Назаров, Р.Р.* «Этническая политика в полиэтническом социуме (на примере Узбекистана» // Культура, личность, общество в современном мире: методология, опыт эмпирического исследования, 2015. стр. 1644-1655.
  R. R. ナザロフ：多言語空間における民族政策－ウズベキスタンを事例に
  Nazarov, R.R. «Ėtnicheskaia͡ politika v polietnicheskom sotsiume (na primere Uzbekistana»
- *Нигъмятзянова, Л. Т.* «Методика написания статей о представителях татарской диаспоры в Узбекистане (на примере энциклопедии “Татары Узбекистана”)» // Проблемы просвещения, истории и культуры сквозь призму этнического многообразия России, 2018. стр. 319-321.
  L. T. ニグミャトジャノワ：ウズベキスタンにおけるタタール・ディアスポラの代表者らに関する記事の執筆技法－事典「ウズベキスタンのタタール」を事例に
  Nig”mia͡tzia͡nova, L. T. «Metodika napisaniia͡ stateĭ o predstaviteliia͡kh tatarskoĭ diaspory v Uzbekistane (na primere ėntsiklopedii “Tatary Uzbekistana”)»

- *Нозимов, А. А.* «Языковая ситуация в Таджикистане: Оценка эффективности языкового планирования» // вестник пятигорского государственного лингвистического университета, 3. 2009a. стр. 250-252.
  A. A. ノジモフ：タジキスタンの言語状況：言語計画の効果の評価
  Nozimov, A. A. «IA͡zykovaia͡ situat͡siia͡ v Tadzhikistane: Ot͡senka ėffektivnosti ia͡zykovogo planirovaniia͡»
- *Нозимов, А. А.* «К вопросу о языковой ситуации в Таджикистане» // Вестник РУДН, серия Вопросы образования: языки и специальность, 1. 2009b. стр. 21-27.
  A. A. ノジモフ：タジキスタンにおける言語事情の問題によせて
  Nozimov, A. A. «K voprosu o ia͡zykovoĭ situat͡sii v Tadzhikistane»
- *Нозимов, А. А.* «Языковая ситуация в современном Таджикистане: состояние, особенности и перспективы развития» // Диссертация на соискание ученой степени доктора филологических наук, 2010. Академия наук Республики Таджикистан. № 05201100088.
  A. A. ノジモフ：現代タジキスタンの言語状況：実態・特徴・発展の見通し
  Nozimov, A. A. «IA͡zykovaia͡ situat͡siia͡ v sovremennom Tadzhikistane: sostoia͡nie, osobennosti i perspektivy razvitia͡»
- *Парвиз, Ахмад.* «Татары Афганистана: прошлое и настоящее» // Мусульманский мир, №4. 2015. стр. 74-76.
  パルヴィズ・アフマド：アフガニスタンのタタール－過去と現在
  Parviz, Akhmad. «Tatary Afganistana: proshloe i nastoia͡shchee»
- *Перотто, М.* «Язык и образование в постсоветской Центральной Азии» // Вестник Евразии, №4. 2008, стр. 49-64.
  M. ペロット：ポスト・ソヴィエト中央アジアにおける言語と教育
  Perotto, M. «IA͡zyk i obrazovanie v postsovetskoĭ T͡Sentral′noĭ Azii»
- *Пилкингтон, Х. и Флинн, М.* «Чужие на родине?» Исследование «Диаспоральной идентичности» русских вынужденных переселенцев // «Диаспоры». 2001.
  http://mion.isu.ru/filearchive/mion_publcations/russ-ost/diaspr/12.html
  H.　ピルキントン・M. フリン：”故郷の他者？”ロシア人の強いられた移住者のディアスポラ・アイデンティティの研究
  Pilkington, X. i Flinn, M. «CHuzhie na rodine?» Issledovanie «Diasporal′noĭ identichnosti» russkikh vynuzhdennykh pereselent͡sev
- *Протасова, Е. Ю. и Алишариева А.А.* «Особенности выбора языка в многоязычном обществе» // Вестник Российского университета дружбы народов. Серия: Вопросы образования: языки и специальность, №1. 2016. стр. 28-36.
  E. Yu. プロタソワ・A.A.アリシャリエワ：多言語社会における言語選択の特徴
  Protasova, E. IU͡. i Alisharieva A.A. «Osobennosti vybora ia͡zyka v mnogoia͡zychnom obshchestve»
- *Рахматуллаев, Ш. М.* «Некоторые аспекты демографических характеристик русскоязычной диаспоры Узбекистана в постсоветский период» // Этнография Алтая и сопредельных территорий, 2011. стр. 54-59.
  Sh. M. ラフマトゥラエフ：ポスト・ソヴィエト時代におけるウズベキスタンのロシア語話者ディアスポラの人口統計的特徴のいくつかの側面
  Rakhmatullaev, SH. M. «Nekotorye aspekty demograficheskikh kharakteristik russkoia͡zychnoĭ diaspory Uzbekistana v postsovetskiĭ period»
- *Ремнёв, А. В.* «Татары в казахской степи: соратники и соперники Российской империи» // Вестник Евразии, №4. 2006. стр. 5-31.
  A. V. レムニョフ：カザフ草原のタタール－ロシア帝国の同志であり競合相手であり
  Remnëv, A. V. «Tatary v kazakhskoĭ stepi: soratniki i soperniki Rossiĭskoĭ imperii»
- *Садыкова, Л.Р.* «Сохранение этнокультурной идентичности «тюрко-татарской» диаспоры в США» // Известия уфимского научного центра РАН, №3-4. 2011. стр. 81-87.
  L. R. サディコワ：米国における「テュルク・タタール」ディアスポラの民族文化アイデンティティの保持
  Sadykova, L.R. «Sokhranenie ėtnokul′turnoĭ identichnosti «tiu͡rko-tatarskoĭ» diaspory v SSHA»
- *Сакурама-Накамура, М. А.* «Татарская диаспора и туган тел: ситуация татарского языка среди татар в странах Центральной Азии» // Татар теле, әдәбияты һәм тарих: үтләне, бүгенгесе һәм киләчәге, 2018. стр. 23-38.
  M. A. サクラマ＝ナカムラ（櫻間瑞希）：タタール・ディアスポラとトゥガン・テル－中央アジア諸国のタタールのタタール語状況
  Sakurama-Nakamura, M. A. «Tatarskaia͡ diaspora i tugan tel: situat͡siia͡ tatarskogo ia͡zyka sredi tatar v stranakh T͡Sentral′noĭ Azii»
- *Семенова, Е. В.* «Языковая политика в современном Таджикистане (по материалам центральной таджикской прессы)» // Азия и Африка сегодня, №10. 2007. стр.29-33.
  E. V. セメノワ：現代タジキスタンにおける言語政策－タジキスタンの中央プレスの資料に基づいて
  Semenova, E. V. «IA͡zykovaia͡ politika v sovremennom Tadzhikistane (po materialam t͡sentral′noĭ tadzhikskoĭ pressy)»
- *Степанова, А. А.* «Языковая ситуация в Республике Татарстан: Конфликт или толерантное равновесие?» // Вопросы психолингвистики, №26. 2015. стр. 169-181.
  A. A. ステパノワ：タタールスタン共和国における言語状況－コンフリクトか寛容なバランスか
  Stepanova, A. A. «IA͡zykovaia͡ situat͡siia͡ v Respublike Tatarstan: Konflikt ili tolerantnoe ravnovesie?»

- *Сулейманов, Д. Ш. и др.* «Обучение татарскому языку на основе мультимедиа и Интернет-технологий» // Образовательные технологии и общество, №16-3. 2013. стр. 664-683.
  D. Sh. スレイマノフほか：マルチメディアとインターネット技術を基盤としたタタール語教育
  Suleĭmanov, D. SH. i dr. «Obuchenie tatarskomu i͡azyku na osnove mul′timedia i Internet-tekhnologiĭ»
- *Сулейменова, Э.Д.* «Языки и этносы Казахстана» // Язык: история и современность, №1. 2017. стр. 78-91.
  E. D. スレイメノワ：カザフスタンの言語と民族
  Suleĭmenova, Ė. D. «I͡Azyki i ėtnosy Kazakhstana»
- *Тесленко, А. Н.* «Социолингвистическое пространство Казахстана: проблемы и тенденции развития» // Современные проблемы социально-гуманитарных наук, №2. 2017, стр. 59-68.
  A. N. テスレンコ：カザフスタンの社会言語空間：諸問題と発展の傾向
  Teslenko, A. N. «Sot͡siolingvisticheskoe prostranstvo Kazakhstana: problemy i tendent͡sii razvitii͡a»
- *Тимченко, И. В.* «Этнокультурный центр как тип национально-культурных объединений» // Новая наука: Теоретический и практический взгляд. 2016. стр. 83-85.
  I. V. ティムチェンコ：民族文化団体の一種としての民族文化センター
  Timchenko, I. V. «Ėtnokul′turnyĭ t͡sentr kak tip nat͡sional′no-kul′turnykh ob”edineniĭ»
- *Усмонов, Р. А.* «Русский язык в культуре и политике Таджикистана» // Язык. Словесность. Культура, 2. 2011. стр. 8-22.
  R. A. ウスモノフ：タジキスタンの文化と政治におけるロシア語
  Usmonov, R. A. «Russkiĭ i͡azyk v kul′ture i politike Tadzhikistana»
- *Усмонов, Р. А.* «Таджикистан: история языковой независимости» // “White Spots” of the Russian and World History, 5. 2014. стр. 74-90.
  R. A. ウスモノフ：タジキスタン－言語的独立の歴史
  Usmonov, R. A. «Tadzhikistan: istoriia͡ i͡azykovoĭ nezavisimosti»
- *Усуяма, Т.* «Постсоветская динамика языковой ситуация на территории стран Центральной Азии» // Мир русского слова и русское слова в мире, XI конгресс международной ассоциации преподавателей русского языка и литературы, том 3. 2007. стр. 234-239.
  T. ウスヤマ（臼山利信）：中央アジア諸国領域における言語状況のソヴィエト後の動態
  Usui͡ama, T. «Postsovetskai͡a dinamika i͡azykovoĭ situat͡siia͡ na territorii stran T͡Sentral′noĭ Azii»
- *Фатхуллова, К. С. и Набиуллина, Г. А.* «Студенческие олимпиады по татарскому языку как возможность самореализации» // Цестник ТГГПУ, №4-38. 2014. стр.316-320.
  K. S. ファトフッロワ・G.A. ナビウッリナ：自己実現の機会としてのタタール語学生オリンピック
  Fatkhullova, K. S. i Nabiullina, G. A. «Studencheskie olimpiady po tatarskomu i͡azyku kak vozmozhnost′ samorealizat͡sii»
- *Хакимов, Р. С.* «Татарская идентичность: состояние и перспективы» // Историческая этнология, 2016, стр. 242-252.
  R. S. ハキモフ：タタール・アイデンティティ：状況と展望
  Xakimov, R. S. «Tatarskai͡a identichnost′: sostoi͡anie i perspektivy»
- *Хайруллин, Г. Т. и др.* «Татары в Казахстане: Энциклопедический словарь» // Издательство «Мир». 2011.
  G. T. ハイルッリンほか：カザフスタンのタタール事典
  Xaĭrullin, G. T. i dr. «Tatary v Kazakhstane: Ėnt͡siklopedicheskiĭ slovar′»
- *Цыряпкина, Ю. Н.* «Русские Узбекистана: Современные этнокультурный процессы (на примере г. Ангрена)» // Гуманитарные науки в Сибири, №3. 2013. стр. 91-94.
  Yu. N. ツィリャプキナ：ウズベキスタンのロシア人－現在の民族文化プロセス：アングレン市の事例から
  T͡Syri͡apkina, IU͡. N. «Russkie Uzbekistana: Sovremennye ėtnokul′turnyĭ prot͡sessy (na primere g. Angrena)»
- *Цыряпкина, Ю. Н.* «Русский язык и социолингвистическая ситуация в Узбекистане» // Мир науки, культуры, образования, №6. 2014. стр. 505-508.
  Yu. N. ツィリャプキナ：ウズベキスタンにおけるロシア語と社会言語学的状況
  T͡Syri͡apkina, IU͡. N. «Russkiĭ i͡azyk i sot͡siolingvisticheskai͡a situat͡siia͡ v Uzbekistane»
- *Цыряпкина, Ю. Н.* «Русские в Узбекистане: языковые практики и самоидентификация (на примере полевых исследований в Фергане) » // Томский журнал лингвистических и антропологических исследований, 2015. стр. 18-28.
  Yu. N.ツィリャプキナ：ウズベキスタンのロシア人－言語実践と自己認識：フェルガナでのフィールド調査から
  T͡Syri͡apkina, IU͡. N. «Russkie v Uzbekistane: i͡azykovye praktiki i samoidentifikat͡siia͡ (na primere polevykh issledovaniĭ v Fergane) »
- *Шигабдинов, Р. Н. и Жукова, Л. И.* «Татары» // Ильхамов, А. А. «Этнический атлас Узбекистана» // Институт открытое общество. 2002.
  R. N. シガブディノフ・L. N. ジュコワ：「タタール」A.A.イルハモフ：ウズベキスタンの民族アトラスより
  SHigabdinov, R. N. i ZHukova, L. I. «Tatary» // Il′khamov, A. A. «Ėtnicheskiĭ atlas Uzbekistana»
- *Шипилов, А. В.* «Правовой статус русского языка в новых независимых государствах центральноазиатского

региона» // Научно-технические ведомости Санкт-Петербургского государственного политехнического университета, №2-196. 2014. стр. 70-74.
A. V. シピロフ：中央アジア地域の新独立国家におけるロシア語の法的地位
SHipilov, A. V. «Pravovoĭ status russkogo i͡azyka v novykh nezavisimykh gosudarstvakh t͡sentral′noaziatskogo regiona»

- *Юсупова, А. Ш.* «Татарская диаспора в Китае: язык и культура» // Жизнь, посвященная тюркологии. 2011. стр. 377-38
A. Sh. ユスポワ：中国におけるタタール・ディアスポラ－言語と文化
IÜsupova, A. SH. «Tatarskai͡a diaspora v Kitae: i͡azyk i kul′tura»

- *Юсупова, А. Ш. и Набиуллина, Г. А.* «Язык и этническая идентичность татарской диаспоры в США» // Вестник ЧГУ, №2. 2016. стр. 158-163.
A. Sh. ユスポワ・G. A. ナビウッリナ：米国のタタール・ディアスポラの民族アイデンティティと言語
IÜsupova, A. SH. i Nabiullina, G. A. «IÄzyk i ėtnicheskai͡a identichnost′ tatarskoĭ diaspory v SSHA»

- *Юсупова, З. Ф.* «Роль олимпиады по русскому языку как неродному в развитии билингвальной языковой личности» // Язык и культура, №38. 2017. стр. 299-305.
Z. F. ユスポワ：バイリンガルの言語人格の発展における非母語としてのロシア語オリンピックの役割
IÜsupova, Z. F. «Rol′ olimpiady po russkomu i͡azyku kak nerodnomu v razvitii bilingval′noĭ i͡azykovoĭ lichnosti»

- *Якупова, Р.И.* «Татарская диаспора в Санкт-Петербурге» // Материалы международной научной конференции: гуманитарные науки в современном вузе как основа межкультурного взаимодействия. 2018. стр. 535-537.
R. I. ヤクポワ：サンクト＝ペテルブルクのタタール・ディアスポラ
IÄkupova, R.I. «Tatarskai͡a diaspora v Sankt-Peterburge»

- *Янова, Д. Р.* «История татарской диаспоры в Узбекистане в XX　веке» // Молодые востоковеды стран содружества независимых государств, 2010. стр. 193-206.
D. R. ヤノワ：20世紀のウズベキスタンにおけるタタール・ディアスポラの歴史
IÄnova, D. R. «Istoriii͡a tatarskoĭ diaspory v Uzbekistane v XX　veke»

- *Гыйләҗев, И. А.* «Татар диаспорасы формалашуның төп үзенчәлекләре» // Tatarica, №1. 2013. бт. 158-171.
I. A. グィレジェフ：タタール・ディアスポラの形成の主な特徴
Ğıyläcev, İ. A. «Tatar diasporası formalaşunıñ töp üzençälekläre»

- *Мортазина, Л. Р.* «XIX газы ахыры - XX газы башында татарларның Төркестанда һәм казах далаларында мәгърифәтчелек эшчәнлеге» // Историческая этнология. № 1. 2017. бт. 155-170.
L. R. モルタジナ：19世紀後半から20世紀初頭のタタールのトルキスタンとカザフ草原における諸啓蒙活動
Mortazina, L. R. «XIX ğazı axırı - XX ğazı başında tatarlarnıñ Törkestanda häm qazax dalalarında mäğrifätçelek eşçänlege»

- *Нәбиуллина, Г. Ә. һәм Фәтхуллова К. С.* «Кытайда яшәүче татар диаспорасы теленең кайбер лингвистик үзенчәлекләре» // Диалектология, история и грамматическая структура тюркских языков: материалы международной тюркологической конференции, посвященной памяти профессора Казанского университета Д.Г. Тумашевой, 2011. 61-64 бт.
G.A.ナビウッリナ・K.S.ファトフッロワ：中国のタタール・ディアスポラのことばにみるいくつかの言語的特徴
Näbiullina, G. Ä. häm Fätxullova K. S. «Qıtayda yaşäwçe tatar diasporası teleneñ qayber lingvistik üzençälekläre»

- *Нурмөхәммәтова, Р. С.* «”Ана теле” онлайн-мәктәбендә җанлы сөйләм дәресләре» // Мәгариф, № 4-10. 2016. 14 бт.
R. S. ヌルモハンマトワ：オンライン学校「アナ・テレ」における生きた会話の授業
Нурмөхәммәтова, Р. С. «”Ана теле” онлайн-мәктәбендә җанлы сөйләм дәресләре»

- *Һисамова, Ф. М.* «Туган тел һәм милләт язмышы» // Tatarica, №1. 2013. 23-35 бт.
F. M. ヒサモワ：トゥガン・テルと民族の運命
Hisamova, F. M. «Tuğan tel häm millät yazmışı»

- *Шаһин, Л.* «Төркия татарларында тел һәм мәдәният мәсьәләләренең торышы» // Языки России и стран ближнего зарубежья как иностранные: преподавание и изучение. 2006. 220-227 бт.
L. シャヒン：トルコのタタールにみられる言語と文化の現状
Şahin, L. «Törkiä tatarlarında tel häm mädäniät mäs’älälärenеñ torışı»

- *Юсупова, Ә. Ш. һәм Денмөхәммәтова, Э. Н.* «Мәдәниятара бәйләнешләрдә кытай татарлары» // Фәнни язмалар, вестфалика. 2011. 269-272 бт.
A. Sh. ユスポワ・E. H. デンモハンマトワ：異文化状況下における中国のタタール
Yusupova, Ä. Ş. häm Denmöxämmätova, E. N. «Mädäniätara bäyläneşlärdä qıtay tatarları»

- *Юсупова, Ә. Ш. һәм Мөгьтәсимова, Г. Р.* «Кытайдагы татар диаспорасы гаиләләрендә туган телнең урыны»

// Фәнни язмалар, вестфалика, 2011. 272-274 бт..
A. Sh. ユスポワ・G.R.モグタシモワ：中国のタタール・ディアスポラの家庭内におけるトゥガン・テルの役割
Yusupova, Ä. Ş. «Möhacirlektä tatar tele (Qıtayda yaşäwçe tatarlar söyläme misalında)»

- *Юсупова, Ә. Ш.* «Мөһаҗирлектә татар теле (Кытайда яшәүче татарлар сөйләме мисалында)» // Тюркский мир и исламская цивилизация: проблемы языка, литературы, истории и религии. 2018. 71-74 бт.
A. Sh. ユスポワ：亡命タタール語－中国に居住するタタールの発話を事例に
Yusupova, Ä. Ş. «Möhacirlektä tatar tele (Qıtayda yaşäwçe tatarlar söyläme misalında)»
- *Юсупова, Ә. Ш. һәм Бавиуллина, Г. А.* «Диаспора сөйләмендә һәм әдәби телдә фигыль теңгәллете» // Фәнни Татарстан, 2018. 7-13 бт.
A. Sh. ユスポワ・G.A.バヴィウッリナ：ディアスポラの発話と文語にみられる動詞の同等性
Yusupova, Ä. Ş. häm Baviullina, G. A. «Diaspora söylämendä häm ädäbi teldä fiğıl' teñgällete»

- *Беркімбаева, Ш.* «Болашақ мектептен басталады» // Қазақстан мектебі, №2. 2003, 3-16 бт. 50-56.
Sh. ベルキムバエワ：未来は学校から始まる
Berkimbaeva, Ş. «Bolaşaq mektepten bastaladı»
- *Жабелова, Т.* «Қазақстанның оқу-ағарты салсасындағы мемелекеттік тіл саясаты» // Адам Әдемі, №19. 2004.
T. ジャベロワ：カザフスタンの教育分野における国の言語政策
Jabelova, T. «Qazaqstannıñ oqw-ağartı salsasındağı memelekettik til sayasatı»
- *Испулова, Г.Ж.* «Қазыргы кездегі үш тұғнрлы тілдің маңызы» // Вестник КГПИ, №1. 2014.
G. Zh. イスプロワ：現代における基本三言語の重要性
Ïspwlova, G. J. «Qazırgı kezdegi üş tuğnrlı tildiñ mañızı»
- *Кикбаева, А. И.* «XX гасырдың бірінші ширегіндегі Казахстан татар халқының элеуметтік стратификациясы» // Межвузовский вестник №4-8. 2009. бт. 166-170.
A. I. キクバエワ：20世紀初期におけるカザフスタンのタタール民族の社会階層
Kıkbaeva, A. I. «XX gasyrdyń birinshi shıregindegi Kazahstan tatar halqynyń eleýmettik stratıfıkatsııasy»
- *Сманова, А. Б.* «Қазақстан Республикасының конституциясы азаматтық қоғамды қалыптастырудың негізгі құқықтық бастауы» // Journal of actual problems of jurisprudence, 5. 2016.
A. B. スマノワ：カザフスタン共和国憲法は市民社会の形成のための主要な法的基盤たる
Smanova, A. B. «Qazaqstan Respwblïkasınıñ konstïtwcïyası azamattıq qoğamdı qalıptastırwdıñ negizgi quqıqtıq bastawı»

- 임영상・김상철 (2000)「중앙아시아 3,4세대 고려인의 의식과 생활문화 변화」『국제지역연구』제4권 제4호. 187-222.
イム・ヨンサン＆キム・サンチョル：中央アジアの第3・第4世代高麗人の意識と生活文化の変化
Yim Yeng-Sang & Kim Sang-Chel: Cwungangasia 3, 4seytay kolyeinuy uysikkwa saynghwalmwunhwa pyenhwa
- 이채문 (2010)「중앙아시아의 이산민족과 초국가주의 고려인과 아흐스카 튀르크인의 비교」『한국동북아학회한국동북아논총한국동북아논총』제55호, 245-272.
イ・チェムン：中央アジアの離散民族と超国家主義：高麗人とメスヘティア・トルコ人の比較
Yi Chay-Mwun: Cwungangasiauy isanmincokkwa chokwukkacwuuy kolyeinkwa ahusukha thwilukhuinuy pikyo
- 이진영・김선아 (2017)「고려인의 음식문화와 정체성: 이주와 혼종 문화로의 변화」『문화와 정치』제4권 1호, 63-96.
イ・ジニョン＆キム・ソナ：高麗人の食文化とアイデンティティ：移住と混種文化への変容
Yi Cin-Yeng & Kim Sena: Kolyeinuy umsikmwunhwawa cengcheyseng: icwuwa honcong mwunhwalouy pyenhwa
- 김범수 (2019)「나의 '고향'은 어디인가? 중앙아시아 고려인의 디아스포라 정치」『서울대학교 아시아연구소아시아리뷰아시아리뷰』제9권 제1호：통권 제17호, 3-37.
キム・ボムス：私の「故郷」はどこにあるのか？中央アジア高麗人のディアスポラ政治
Kim Pemswu: Nauy 'kohyang'un etiinka? cwungangasia kolyeinuy tiasuphola cengchi
- 유승만 (2009)「우즈벡어의 언어위상 변화와 우즈베키스탄 내 소수 민족어 문제」『러시아연구』제19권 제1호, 93-118.
ユ・スンマン：ウズベキスタンにおけるウズベク語の位置づけの変化と少数民族言語の問題
Yu Sung-man: Wucupeykeuy enewisang pyenhwawa wucupeykhisuthan nay soswu mincoke mwuncey

【公文書】

《ロシア連邦・タタールスタン共和国》

- Договор «о разграничении предметов ведения и полномочий между органами государственной власти

Российской Федерации и органами государственной власти Республики Татарстан» // 21 марта 1992 г. (*Настоящий договор утвержден Федеральным законом от 24 июля 2007 г. № 199-Ф3)

- Государственная программа «Сохранение, изучение и развитие государственных языков Республики Татарстан и других языков в Республике Татарстан на 2014-2022 годы» // Утверждена постановлением Кабинета Министров Республики Татарстан, 25 октября 2013 г. № 794
- Государственная программа «Сохранение национальной идентичности татарского народа на 2014-2022 годы» // Утверждена постановлением Кабинета Министров Республики Татарстан, 21 октября 2013 г. № 785

《ウズベキスタン共和国》

- O'zbekiston Respublikasining qonuni «O'zbekiston Respublikasining davlat tili to'g'risida» 1989-yil 21-oktyabr, 356-XI-son. // Закон Республики Узбекистан «О государственном языке Республики Узбекистан» 21 октября 1989 г. № 3561-XI.
- O'zbekiston Respublikasining qonuni «Davlat tili haqida» 1995-yil 21-dekabr, 167-I-son. // Закон Республики Узбекистан «О государственном языке» 21 декабря 1995 г. № 167-I.
- O'zbekiston Respublikasining qonuni «Ta'lim to'g'risida» 1997-yil 29-avgust, 464-I-son. // Закон Республики Узбекистан «Об образовании» 29 августа 1997 г. № 464-I
- O'zbekiston Respublikasi «Kadrlar tayyorlash milliy dasturi» 1997-yil 29-avgust. 463-I-son.

《カザフスタン共和国》

- Закон Казахской Советской Социалистической Республики от 22 сентября 1989 года «О языках в Казахской ССР».
- Қазақстан Республикасының тіл саясатының тұжырымдамасы туралы Қазақстан Республикасы Президентінің 1996 жылғы 4 қарашадағы № 3186 Өкімі // Распоряжение Президента Республики Казахстан от 4 ноября 1996 года № 3186 О Концепции языковой политики Республики Казахстан.
- «Қазақстан Республикасындағы тіл туралы» Қазақстан Республикасының 1997 жылғы 11 шілдедегі № 151 Заңы. // «О языках в Республике Казахстан» Закон Республики Казахстан от 11 июля 1997 года № 151.
- «Тілдерді қолдану мен дамытудың 2001-2010 жылдарға арналған мемлекеттік бағдарламасы туралы» Қазақстан Республикасы Президентінің 2001 жылғы 7 ақпандағы № 550 Жарлығы (2010.15.07. берілген өзгерістер мен толықтыруларымен) // Указ Президента Республики Казахстан от 7 февраля 2001 года № 550 «О Государственной программе функционирования и развития языков на 2001-2010 годы» (с изменениями и дополнениями по состоянию на 15.07.2010 г.)
- «Қазақстан Республикасында тілдерді дамыту мен қолданудың 2011 - 2020 жылдарға арналған мемлекеттік бағдарламасы туралы» Қазақстан Республикасы Президентінің 2011 жылғы 29 маусымдағы № 110 Жарлығы (2015.04.12. берілген өзгерістер мен толықтырулармен) // Указ Президента Республики Казахстан от 29 июня 2011 года № 110 «О Государственной программе развития и функционирования языков в Республике Казахстан на 2011-2020 годы» (с изменениями и дополнениями от 04.12.2015 г.)
- «Қазақстан Республикасындағы тіл саясатын іске асырудың 2020 - 2025 жылдарға арналған мемлекеттік бағдарламасын бекіту туралы» Қазақстан Республикасы Үкіметінің 2019 жылғы 31 желтоқсандағы № 1045 Қаулысы // Постановление Правительства Республики Казахстан от 31 декабря 2019 года № 1045 «Об утверждении Государственной программы по реализации языковой политики в Республике Казахстан на 2020 - 2025 годы»

《タジキスタン共和国》

- Барномаи Ҳукумати Ҷумҳурии Тоҷикистон оид ба рушди забони давлатӣ ва забонҳои дигар дар қаламрави ҶумҳуриитТоҷикистон // № 459. 21.10.1997.
- Дар бораи забони давлатии Ҷумҳурии Тоҷикистон // № 553, 05.10.2009.
- Барномаи рушди забони давлатии Ҷумҳурии Тоҷикистон барои солҳои 2012-2016 // № 335, 30.06.2012.

【非公刊資料および内部資料】

- Бөтендөнья татар конгрессы «Бөтендөнья татар конгрессына 20 ел» .
  「世界タタール会議」の設立20周年を記念して発行された小冊子で、2015年4月にタタールスタン共和国教育科学省職員のM氏（本人の希望により仮名）より提供を受けた。発行元および発行年は明記されていないが、巻頭の記述から2012年に世界タタール会議により発行されたものと考えられる。（タタール語・全19頁）
- Министерство образования и науки Республики Татарстан «Положение о проведении Международной

олимпиады по татарскому языку». 10.11.2016 - №. исх-2990/16.
国際タタール語（・タタール文学オリンピック）の開催規約および予算配分の決定に関するタタールスタン共和国教育科学省の非公開文書。2017年4月にタタールスタン共和国教育科学省第一副大臣ハディウッリン氏より提供を受けた。2016年11月改定規約版。（ロシア語・全5頁）

- Министерство образования и науки Республики Татарстан «О динтанционном обучении татарскому языку по проекту “Ана теле”». 20.01.2020 - № 51a
「Ана теле」のコース設置状況および運用状況（登録者数推移・登録コース別人数等）に関するタタールスタン共和国教育科学省の非公開資料。なお、報告書作成者はカザン連邦大学に所属し「*Ана теле*」の開発に携わるカザン連邦大学所属のN准教授。2020年1月にタタールスタン共和国教育科学省職員のM氏（本人の希望により仮名）より提供を受けた。（ロシア語・全22頁）

資料 2. 博士論文の構成

序章

0.1. はじめに
0.2. 先行研究の検討
0.3. 研究課題の設定
0.4. 研究方法
　0.4.1. 言語法の整理
　0.4.2. 質問表を用いた聞き取り調査
　0.4.3. タタール語の文法・語彙知識を問う簡易試験の実施
0.5. 研究対象
　0.5.1. 研究対象者の設定
　0.5.2. 調査対象者の選定
　0.5.3. 研究対象地域の設定
0.6. 分析方法
0.7. 本研究の構成

第 1 章「概念の検討と設定」

1.1. 言語政策
1.2. 国家における言語の役割
1.3. 言語政策におけるマイノリティ言語
1.4.「国語」と「国家語」
1.5.「母語」とは何か
1.6. タタール ・ディアスポラ

第 2 章「タタール・ディアスポラとタタールスタン共和国」

2.1. タタールの移動
　2.1.1. タタールの成り立ち：現代のタタールとは誰か
　2.1.2. タタール商人と各地への移動
2.2. タタールスタン共和国とタタール ・ディアスポラ
　2.2.1. タタールスタン共和国の成立と主権の宣言
　2.2.2. タタールスタン共和国代表部の設置
　2.2.3. タタール文化センター
2.3. タタールスタン共和国国家プログラム
　2.3.1. タタールスタン共和国の国家語および諸言語の保存、研究および発展：2014～2022
　2.3.2. タタール民族の民族アイデンティティの保護：2014～2022
2.4. タタール語振興に向けた取り組み
　2.4.1. カユーム・ナスィーリー・インスティトゥティの設置
　2.4.2. オンライン・タタール語学習システム「*Ана теле*」の開設
　2.4.3. 国際タタール語オリンピックの開催
　2.4.4. カザン連邦大学におけるディアスポラ学生プログラム
　2.4.5. 小括

第 3 章「事例 I：ウズベキスタン共和国の言語政策とタタールの言語選択」

3.1. ウズベキスタンのタタール
　3.1.1. 歴史
　3.1.2. 人口統計
3.2. タタールスタン共和国とのつながり
　3.2.1. 共和国代表部
　3.2.2. タタール文化センター
　3.2.3. タタール民族アンサンブル
　3.2.4. タタール語講座の開講
3.3. ウズベキスタンにおける言語政策の変遷
　3.3.1. 中央アジアにおける言語と教育
　3.3.2. ウズベキスタン共和国の言語政策の歴史
　3.3.3. 1992 年「ウズベキスタン共和国憲法第 4 条」

3.3.4. 1995 年言語法「国家語に関して」
3.3.5. ウズベク語社会への移行
3.3.6. 複雑な多言語社会：統計から見る民族語
3.3.7. 小括
3.4. 調査概要
3.4.1. 調査地の選択
3.4.2. 調査期間と調査方法
3.4.3. 調査協力者概要
3.4.4. 質問票内容
3.5. 調査結果（量的）
3.5.1. 教育言語と第一言語
3.5.2. 日常会話が可能な言語・学習言語
3.5.3. 家庭内言語
3.5.4. 日常生活のなかの言語選択
3.5.5.「母語」観
3.5.6. タタール語の状況
3.5.7. 小括
3.6. 調査結果（質的）

第 4 章「事例 II：カザフスタン共和国の言語政策とタタールの言語選択」
4.1. カザフスタンのタタール
4.1.1. 歴史
4.1.2. 人口統計
4.2. タタールスタン共和国とのつながり
4.2.1. 共和国代表部
4.2.2. タタール文化センター
4.2.3. タタール語講座の開講状況
4.3. カザフスタンにおける言語政策の変遷
4.3.1. 1993 年「共和国憲法」と 1995 年「改正共和国憲法」
4.3.2. 1997 年言語法「カザフスタン共和国における諸言語法」
4.3.3. 2001 年「2001 年～2010 年諸言語振興国家プログラム」
4.3.4. 2007 年「カザフスタン 2030」
4.3.5. 2011 年「2011 年～2020 年諸言語振興国家プログラム」
4.3.6. 2012 年「カザフスタン 2050」
4.3.7. 2019 年「2020 年～2025 年諸言語振興国家プログラム」
4.3.8. 学校教育における民族語
4.3.9. 小括
4.4. 調査概要
4.4.1. 調査地の選択
4.4.2. 調査期間と調査方法
4.4.3. 調査協力者概要
4.4.4. 質問票内容
4.5. 調査結果（量的）
4.5.1. 教育言語と第一言語
4.5.2. 日常会話が可能な言語・学習言語
4.5.3. 家庭内言語
4.5.4. 日常生活のなかの言語選択
4.5.5.「母語」観
4.5.6. タタール語の状況
4.5.7. 小括
4.6. 調査結果（質的）

第 5 章「事例 III：タジキスタン共和国の言語政策とタタールの言語選択」
5.1. タジキスタンのタタール
5.1.1. 歴史
5.1.2. 人口統計
5.2. タタールスタン共和国とのつながり
5.2.1. タタール文化センター

5.2.2. タタール民族アンサンブル
5.2.3. タタール語講座の開講状況
5.3. タジキスタンにおける言語政策の変遷
5.3.1. 1989 年言語法「言語に関して」
5.3.2. 1994 年「タジキスタン共和国憲法第 2 条」
5.3.3. 1997 年「タジキスタン共和国領内における国家語と他の言語の発展に関する国家プログラム」
5.3.4. 2009 年言語法「タジキスタン共和国の国家語に関して」
5.3.5. 学校教育における民族語
5.3.5. 小括
5.4. 調査概要
5.4.1. 調査地の選択
5.4.2. 調査期間と調査方法
5.4.3. 調査協力者概要
5.4.4. 質問票内容
5.5. 調査結果（量的）
5.5.1. 教育言語と第一言語
5.5.2. 日常会話が可能な言語・学習言語
5.5.3. 家庭内言語
5.5.4. 日常生活のなかの言語選択
5.5.5.「母語」観
5.5.6. タタール語の状況
5.5.7. 小括
5.6. 調査結果（質的）

終章

6.1. 言語政策とタタール・ディアスポラの言語選択
6.2.1. 研究課題① 国外（タタールスタン共和国）の言語政策が言語選択に与えうる影響
6.2.2. 研究課題② 国内（居住国）の言語政策が言語選択に与えうる影響
6.2.3. 研究課題③ タタールの言語選択：タタール語の選択／不選択のプロセス
6.2. 民族境界の維持：タタールらしさをどこに見いだすか
6.3. 結論から何が言えるか
6.4. 今後の課題と展望